
英雄伝説 - 刹那の軌跡 -

天魔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

英雄伝説 - 刹那の軌跡 -

【Zコード】

N5147Y

【作者名】

天魔

【あらすじ】

キーアは最悪の可能性を感じ取ってしまった

彼女は失われつつ有る、力の欠片を振り絞つて願つた

-助けて-と

幸か不幸か、それはある男に届いてしまった

この物語はその男に一通の手紙が届くことで始まる

現実はそこまで甘くはない

それを知りながらも壊そと藻搔く彼らを面白いと思つた

全ては終わりから始まっていた……

歌劇の始まり

初めまして、諸君。

いや、お久しぶりといったほうが良いかもしねないな。
私は怪盗B、世間ではそう呼ばれている者だ。

此度、ファルコムから碧の軌跡が発売されました。
もうすでにクリアした方も多いことだろう。

しかし、いくつかの都合が良すぎる点が気になりますね。
それを少し変えた歌劇を皆様にお見せしたい。

では、その幾つかとはなんなのか？
それは三つござります。

まず一つ目、我らが同志、殲滅天使のことだ。

悲劇にも、この舞台では親代わりだったパテル＝マテルが壊れてしまつた。

ヨシュア曰く、もう直せないこと……
彼女の過去から考えるに彼女はとても弱い。

戦闘能力ではなく、心が……だ。

彼女は今まで殻に籠つていたからこそ、耐えてこられたのだ。
それがエスティル達によつて破られてしまつた。

確かに新たに心の拠り所が出来始めていた。

しかし、如何せんパテル＝マテルほどの奥底までに辿り着くには少しばかり時間が足りなかつた。

そこに辿り着くまでにパテル＝マテルが壊れてしまつた。

彼女は最大の心の拠り所がなくなつたことで今まで耐えてきたモノを守るもののがなくなつてしまつ。

それで起こつたことは彼女の精神崩壊……
彼女は所謂廃人となつてしまつた。

次に二つ目、熊鷹先生ことイアン先生だ。

最後の最後にロイドに説得されてキーアに話しかけたところでマリアベルに攻撃されてしまった。

ここで気になるところがある。

確かに彼女の攻撃は仮死状態にしただけかもしれない。

しかし、その後の手当が遅すぎる。

あれほど遅くなってしまっては血を失いすぎて、死んでしまう可能性のほうが高すぎる。

助かつたとしても田が覚める可能性はかなり低く、仮に田覚めるとしてもかなり遅くなるだろう。

普通に考えて、帝国からのクロスベル解放にはまず間に合わないと見てもいいだろう。

最後に三つ目、アルカンシェルの最大の田玉、イリア・プラティエだ。

彼女はリハビリを経て、再び舞台の上に立つことが出来た。いやはや、素晴らしいの一言だ。

事実は小説よりも奇なり……正にこれを体現する。

しかし、現実というものはそこまで甘くはない。

コレについては長くなるので本編で……

これから語る物語はこの三つの可能性を因果を弄ぶ力を失いかけてキーアが知覚してしまったことから始まる。

この三つを感じた彼女はそれではまたロイドたちがとても悲しみにくれてしまふということから、最後の欠片を振り絞つて願つてしまつ。

-助けてーと……

それを感じ取ったのはこれまた面白く、私の親友であった。

彼もまた、私とは近くて遠い美的センスを持つていて、互いに高め合う同志だ。

あのオリビエの様にライバルではなく、友でもない。

奇妙な関係だが、私は彼にとても惹かれている。

そして、彼が魔都クロスベルに行く理由は、私の一通の手紙が原因だ。

さてさて、長話はコレくらいとして、物語を始めようか。

それでは皆様、この物語が良きものであると願つて……

縁がござりましたら舞台の上でもまた会いましょう。

それでは皆様、御鑑賞下さいませ……

歌劇の始まり（後書き）

設定の三つに関しては次回で詳しく書いていく予定です
一つ一話程度になる予定です
更新は一月に一度の予定?
調子に乗ればもっと早いかも

終わりから始まつへ - 前編 - (前書き)

レンに関してはフルコムの設定であるので楽でした
熊髭さんは描くこと少ないからイリアと混ぜる予定です
イリアはやたら長くなりそうなんだすけどね

終わりから始まりへ -前編-

全ては終わりから始まっていた。

「えッ……？」

「どうしたんだ、キーア？」

樹が崩壊する寸前、キーアは感じ取ってしまった。
このままでは訪れてしまう悲劇。

それを覗てしまい、それはもう既に手遅れなのを理解してしまった。
一つ目はレンを襲う悲劇、二つ目は先程目の前で仮死状態にされて
しまったイアン、三つ目はイリア……

「そんな……、なんで今更ツツツツ！？」
「キーアッ！？」

かつてロイド達が死ぬことを知った時と同じくらいの悲しみがキー
アの心に溢れた。

それは先程まで明るく希望に満ちていたこの空間が一瞬でそれが塗
りつぶしてしまった。

「そんなダメ！？」
「だ……れ……か……」
「誰……か……」
「誰か、助けてツツツツ！」

力は既になくなりかけていることも承知でキーアは願ってしまった。
否、それを考えることすらなく、只々願ってしまった。
その反作用で何が起きるかも分からぬままに。

そしてそれは幸か不幸か届いてしまった。

因果を弄ぶ力を持つた幼き少女の願いは届いてしまったのだ。
これからどうなるかも解らない儘……

「……たくつ、ガキは脳天気な顔して笑つてりや良いんだよ。
好きなだけ泣け、笑え、怒れ、子供つてのはそういうもんだ。
小難しいことは大人に全部任せてたら良いんだよ……
だから……難しいことは俺に任せろ……な?

さあ、最後は俺だけのソロステージだ」

一つ目の悲劇は、パテル＝マテルが壊れてしまつたことだ。

ヨシュア曰く、もう直せないとのこと……

彼女の過去から考えるに彼女はとても弱い。

戦闘能力ではなく、心が……だ。

彼女は今まで殻に籠つていたからこそ、耐えてこられたのだ。

その殻は、レンがかつて『樂園』と呼ばれていた場所にいた時に作られたものだ。

『樂園』はペドフィリアに対する売春をする施設だった。

そこにはレンと数人の仲間たちがいた。

?リーダーの『クロス』

?好奇心旺盛の女の子・エッタ

?可憐で大人びた女の子・アジュ

?いつも殴られている男の子・カトル

?お姫様の『レン』

それ以外にもいたがレンは『どうでもいい』と思っていた。
しかし、お姫様である『レン』には仕事が来ませんでした。
他の子達が瘦せ細ろえていく中、自分だけはおいしいものを食べ、
お人形で遊んでいれば良かつた。

何故、レンには仕事が来なかつたのか……？

その理由を彼女は『特別だから』と言い、周囲の子供達も『レン』
が喜んでくれればそれでいい、と口にしていた。

普通に考えれば一人だけ苦痛を味わないなんて理不尽が子供たちに
我慢できるわけがない。

けれど、次第に他の子供達は段々と消えていきました。
ある日、『レン』は『クロス』にいました。

「他の子達は何処に行つたの？」と……

それに対して『クロス』の返答はこうだつた。

「ここは元々、僕とレンだけの世界だ」

さうして『クロス』は続けて言つ。

「他のみんなはすぐに殺しちゃつたくせに。
なんで僕だけ生かしておくんだ」

それは『クロス』が疲れていからだつた。

他のみんながいなくなつたから疲れているのだ。

クロスが疲れているから、他のみんなが消えた。

『身喰らう蛇』は崇高ではない無粋な組織を潰す事がある。

今回の対象は『樂園』だつた。

その時やつて来たレー・ヴェは『クロス』の体にある無数の十字傷を見て言つた。

この無数の『クロス』は自分で傷つけたものだ。
自我を保つためにやつたのだ、と。

つまり、クロスとは『レン』という人格を守るためにつけた傷の事。他の仲間とは、レンが持つの人格の事なのです。
本当に別の子供がいたわけではなかつたのです。

客から様々な注文を受けられ、多くの嗜好に合わせなければならなかつた。

その中で、本当の『レン』を守るために、生まれた人格があの4人。

どの人格も彼女の一^部である。

本当の『レン』という人格は、彼女が自我を保つために、クロスを始め、4人の子供達を生み出だし、演じました。

そうする事で自分を守るしかなかつた。

『クロス』がリーダーだつたのは、傷を刻む事がもつとも彼女を保つ術だつた。

しかし、その最後の人格さえも壊れてしまう時が來た。

もう彼女を守る人格など存在していない。

そして本当の『レン』さえも傷付いてしまう前に身喰らう蛇が『樂園』を壊しに來た。

その後の『レン』は執行者となり、執行者としてとても優秀だつた。天才であつた彼女は、また別の道を見つけたのに、それでも本当の自分ではなかつた。

同じように自我を守る為了の自分を作り出したのだ。

しかし、不幸なことに優れすぎていたからこそ、それは周囲に認められてしまった。

だから彼女の心は全く強くはない。

今までずっと目を逸らし、逃げ続けてきたのだから……

だが、その執行者の『レン』をエステルに壊されてしまった。エステルならば本当のレンを救うことは出来るだろ？

ヨシュアを救つたように。

太陽のように照らすことで、きっと救えるはず

だった。

しかし、すでに縁となっていたパテル＝マテルが壊れてしまった。まだ、心が強くなつていらないレンにとってこの衝撃はとてもなく大きすぎた。

本当のレンはそれに耐えられはしなかつたのだ。

今しばらく、時間があれば何とかなつたかもしれないが……それに耐えられなかつたレンはまともな受け答えどころか、食事すらまともに喉を通らなくなつてしまつた。

田に田に衰弱していくレン。

それを世話するエステル達もとても悲しんでいた。

キーアはこの光景を観てしまった……

ロイドたちを助けるために勝手に呼び寄せた……

自分の我慢で振り回してしまつたから、彼女はパテル＝マテルは壊れてしまい、レンは廢人へとなつてしまつた……

キーアはその事実を観てしまった。

だからこそこの未来を認めたくなかった。

だから、願つてしまつた

終わりから始まりへ - 後編 -

キーアが知覚した二つ目の悲劇はイアン先生だった。

彼は先程キーアの目の前でマリアベルに攻撃された。

確かに彼女は仮死状態にしだけだつたかもしない。

しかし、攻撃の衝撃でそれなりの速度で柱に叩き付けられ、内蔵も幾つか壊れてしまつてゐるだろうということは容易に想像できるだろう。

果たして、それだけの重症を負いながら、明らかに遅い手当で命を取り留められるのか？

どう考へても答えはNOである。

仮に命だけは助かつたとしても、目が覚める可能性は極めて低い。

しかし、この事件の後でクロスベルを襲う悲劇。

帝国の侵略に抵抗するにはイアンの力は必要不可欠だ。

ロイドたちの性格などから鑑みるに、帝国に抵抗するのは必至。そこで彼の力が欠けた状態では唯でさえ、分が悪すぎる彼らが命を落とす可能性は高くなるだろう。

仮にそうなつてしまつてからでは遅すぎる。

その時にはもうキーアの因果を弄ぶ力はなくなつてゐるのだ。

- もうあの時の悲しみを味わいたくない

その一心でキーアは切に願つた。

この要因が彼女に幸せを願う気持ちを強くさせた。

三つ目の悲劇はイリア・プラティエ。

アルカンシェルの花形スターである彼女。

太陽のような彼女は多くの人を魅了した。

舞台の上では勿論、プライベートの時でもその性格や行動で様々な人を惹きつけた。

しかし、彼女はイエーガーのクロスベル襲撃で重症を負ってしまった。脚に関してはもう動くことすら怪しい。

それでも彼女は決して諦めなかつた。

リハビリは大きな苦痛を耐え忍び、それでも懸命に真っ直ぐに突き進む彼女の姿は周りからは輝いて見えたことだろう。

そして、念願のリハビリの成果でウルスラ病院の医師によつて脚が回復したことを告げられた。

それから彼女は今までの時間を取り戻すかのように舞台で練習を重ねた。

その姿を見ていたリーシャも安堵していた。

リーシャは自分がいたからシャーリイがアルカンシェルを襲撃したと思っていた。

だが、事実はそうではなく、彼女がいなかつた所でイエーガーはアルカンシェルを襲撃しただろう。

そして、練習に練習を重ねたイリアは遂に公演の舞台に上がる。

しかし、ここで悲劇に襲われた。

イリアが舞台に上ることが確定したことにより、新聞社によつて大々的に取り上げられることになつた。

クロスベルの中でイリアを知らぬものは居らず、誰もが彼女に魅了されていた。

その彼女が襲撃によつて重症を負い、リハビリを経て、再び舞台の上に上がる。

これほど人々を騒ぎ立てるモノはないだろう。

リハービリをしている間も何かと彼女の記事が多く書かれていた。

中には『イリア、再起不能か！？』等といったゴシップ記事が大いに出回った。

時の人である彼女の行動はクロスベル全体に大きく影響を及ぼしていた。

そして遂にその復活劇のクライマックスに悲劇は起きた。

復帰最初の公演のクライマックスだった。

彼女は突如、膝をついた。

その行動に誰もが呆気に取られ、目を疑つた。

そしてそのまま、彼女は倒れ、会場は沈黙に支配された。

誰もが願わず、信じられないことが起こったのだ。

その日はそのまま幕が降り、イリアは再び病院に行く羽目になった。そして精密検査の結果、イリア・プラティエは再起不能を申告された。

この日以来、彼女は自分の脚で立つことすら出来なくなってしまった。

それはクロスベルに大きな影響を与えた。

イリアはクロスベルにとって大きな希望だったのだ。

グノーシスの薬物事件、イエーガーの襲撃、クロイス家の野望、そしてディーター大統領による独立宣言。

これら全ての事件がクロスベルに大きな影響を与え、未だに修復すら儘ならない状況での、帝国の侵略。

その絶望の中でのイリアは正しく希望だったのだ。

その希望が瞬く間に絶望へと変わった。

太陽な彼女が一瞬で沈んでしまったのだ。

明けない夜が無いように、沈まない朝もないのだ。

そして、此度の朝は短すぎて、さらに深い夜を呼んでしまった。

一瞬の煌きはさらに深い闇を演出するだけに終ってしまったのだ。

一度でも……

たった一度でも公演が成功していたならば、それは希望になつたかもしれないが、それは果たされぬままに、より印象的な絶望を植えつけただけだつた。

イリアの脚が、まだ少しでも動くなれば状況が変わつたかもしれないが、微塵も動かすことが出来なかつたのだ。

クロスベルは希望から一転、絶望の底へと落とされたのだ。

そして、この事件で一番影響を受けたのは他ならぬリーシャだつた。彼女はイリアに対し後ろめたく思つていた。

自分の存在が、『銀』という存在が災い呼んでしまつたのだと思つていた。

そして、その数日後、リーシャはクロスベルから姿を消した。

彼女はやつと見出した光の道を自らの意志で閉じたのだ。

『銀』へと、復讐の道へと墮ちていつたのだ。

それから『銀』の名は裏世界に轟き始めた。

より残忍、より残酷な殺し方を始めた『銀』

裏世界でその名を知らぬものとなり、大いに恐怖を与えた。

リーシャの失踪はすぐさまイリアに告げられて、それを聞いた彼女は一言だけ呟いた。

「今、あの娘は何処で何やつてるのかしらね……」

その眩いた姿は普段からの彼女からは想像できず、何処か寂しげな姿だったといつ。

キーアは知覚してしまつた。

この大いなる絶望を、誰もが包まれる絶望を。
故に彼女は願つた。

「JRの絶版を希望へと改める可能性を……」

終わりから始まりへ -後編-（後書き）

これでようやく本編へと入れます
それにしても結構削っちゃいました
無駄に長く書いても変になつてしましましたので...
もうすこし表現がうまくなりたいです

第1話 機械仕掛けの銀細工（前書き）

時間的には零の軌跡の内容になります
これから一気に時間が飛ぶ可能性もあるので、「容赦を

第1話 機械仕掛けの銀細工

帝国との国境の境に設置されたベルガート門と呼ばれる関所。

「漸く着いたか」

そこを通り、クロスベルへと向かうと思われる男がいた。
帝国からクロスベルへ入ろうと、今まで乗ってきた物から降りて窓口へと歩いた。

通門審査票に書き込み、窓口嬢へと手渡す。

「お名前はアルクエイド・ヴァンガードさんですね？」

「ああ」

「通門目的は帰宅……

場所は……ローゼンベルグ工房？」

「何か問題でもあるか？」

帰る場所に首を傾げられた事に、疑問を持ち訪ね返す。

「い、いえ……

あの、あなたが人形作りで有名な人なんですか？」

少し狼狽えながら、窓口嬢は目の前の男へ聞く。

クロスベルのローゼンベルグ工房と言えば誰もが知るほど有名だ。
アンティーケ人形で有名な人物がそこにいるという噂だ。
そこで作られた人形はマニアが桁外れなミラを出して欲しがるとい

う。

そこに帰るとなると聞きたくなることだらつ。

そうでなくとも彼女は警備隊の一員だ。

目の前にサングラスをして、黒い生地に深紅の歯車の刺繡がされたコートを着ている男がいたら不信に思い、話しかけるのは当然だろう。

う。

「違う

「そ、そうですか、しつ失礼しました」

冷たく否定された言葉に彼女は慌てて頭を下げる。

「もつ通つても良いか?」

「はつはい、どうぞ!」

アルクエイドはそれを聞くとここまで乗つてきた物に戻つていった。乗り物に近づいて行くと恐らくそれが有る場所を中心に入りの円が出来ていた。

・また何時ものことか

それを煩わしく思いながらも戸惑いなく歩いていく。そこに集まっている人を搔き分けながら歩む。

「人の物に纏わり付かないでくれないか?」

「これはあなたの物ですか?」

乗り物の場所まで行くと一人の警備服を着た少女が立っていた。

「そりだが、それが何か？」

「あなたのコレは何でしようか？
一見、タイアがあることから乗用車の一つだと想ひのですがこう
いう形は見たことないです」

オーバーサイクル

「魔導一輪車って言ひ、まあ車の一種だな。

一輪車だから色々面倒だが、その分便利ではある」

「いえ、そういう意味ではなくて……」

「ああ、法律上の問題か？」

「一応一般乗用車として登録もあるし規律も守っている」

「そうですか、それは失礼しました」

それを警備隊の少女は敬礼して謝罪をする。

「気にしないでくれ、こいつのことだ。」

「あー、えーっと……」

「私はノエル・シーカーといいます。

階級は曹長です」

「と言つ訳だ、曹長。

もう行つてもいいか？」

「はい、結構です」

アルクエイドはオーバーサイクルに跨つてエンジンをかけた。
一定のエンジンの駆動音と心地良い振動がアルクエイドの体に伝わ
つていく。

「ああ、そうだ、余計な手間をかけた手間賃だ。

「一つ渡すから、窓口の奴にも一つ渡しておいてくれ」

そう言つてアルクエイドは、腰に付けたバッグから無造作に丸い銀色の物を一つノエルに投げ渡した。

同じ物が幾つも入っているのか、手を入れた時にガチャガチャと音がした。

ノエルが慌てて受け取るのを見ると一気に加速して瞬く間に姿が小さくなつていった。

「彼は一体誰なんでしょうか？」

ノエルは突然の行動にも驚きながら、その後姿を見送った。

彼の姿が見えなくなるまで呆然としていた。

彼女は手元にある、先ほど投げ渡された物を見るとすぐさま驚愕した。

「えっ！？」

「コレって……」

銀のチョーンに結ばれたそれはある機械だった。

そこに刻まれた盾と翼を組み合わされた紋章の上にVの文字。

これは世界で有名な銀細工のエンブレムだった。

それは誰が造つているのか、どこに住んで居るのかさえ謎に包まれた作品だった。

ある時は裏社会のオークションで、ある時は田舎町の露天商の中に

売られている場所すらも不特定で、出品者は知らない奴から買った
と言ひ。

オークションではその国の大物だつたり、露天商では前から居た浮浪者や捨て子から買ったという。

作られた物は様々で、何かの像であつたり、時計だつたり、アクセサリーだつたりする。

有名な芸術作品はある種の法則性が必ず存在する。
絵ならば書く対象、細工ならば造る種類といった風に。
それは各個人の誇りや求める物が起因するからだ。

こういう天才と呼ばれる狂人は、何かを極めることで産まれる。
その何かに重点、誇りとして搖るぎない物が存在するからだ。
故にそれを根底に置いた統一性があるはずなのだ。
しかし、これは何も統一性が無いのだ。

敢えて法則性を上げるならば素材が銀と言うことだけ。
何故制作者が個人だと分かつた理由は全ての品に小さい深紅の歯車
とその上にAと刻まれていたからだ。

そして、一番の謎はどうしてそれが有名になつたのか……だ。
それはこのHンブレムを刻まれた最初の品が原因だった。

最初の品は5年前にある捨て子が質の悪い商品に売つたことが始まりだつた。

その捨て子がある日、目覚めるとその紋章が刻まれたペンダントを握っていた。

それを見た捨て子は、ある優しい人が価値ある物をくれたのだと喜んだ。

その捨て子は大はしゃぎで近くで開いている露天商に売りにいった。

その露天商は物を見る目があつたのか、捨て子の持つてているペンドントがとても価値ある物だと思った。

しかし、意地悪な露天商は数十ミラで捨て子から買い取った。思つた程ではないと思つた捨て子だったが、数十ミラも渡されると駆け足で去つていった。

それにはくそ笑んだ露天商はそれを数万ミラで売りに出した。しかし、流石に高すぎたのか、その日はそれは売れなかつた。少ししょぼくれながらも帰つた露天商だったが、次の日から現れなくなつた。

数日後、不思議に思つた捨て子は、人に聞いてみるとペンドントを卖つた次の日にバラバラ死体で見つかつたといつ。

それに驚いた捨て子だったが、次の日田観めると、手に死んだ露天商に卖つたはずのペンドントがあつた。

また誰かがくれたと思つた捨て子は売ろうとしたが、あの露天商は既にいなくなつていて。

仕方なく、捨て子はペンドントを首からかけながら街を歩いていた。すると、捨て子は老婆から声をかけられた。

「坊や、良いペンドントをしておるね。
それを卖つては貰えぬかの？」

声をかけてきた老婆は街で有名な人で、アクセサリーを集めるのが趣味で世界中から集めていふと噂だつた。

捨て子は喜んで売ると数万ミラも手渡された。

ペンドントがそれ以上の価値があると見た老婆は捨て子を遠い町の孤児院に連れて行つた。

孤児院に連れて行かれた捨て子は今もその老婆と交流を保ちながら、孤児院で暮らしている。

それ以降、度々世界にそのエンブレムの品が至る所に出回り始めた。その品々はわざと価格を低く買つと購買者が謎の死を迎えることが幾度も起きた。

その品々は曰わく品として世に出回った。

裏社会のオークションで売られている理由はそれだった。芸術作品としても価値が高いとされるそれらは、買つものが後を絶たない。

そして今から3年前に表社会にも出回り始めた。

それはアクセサリーなどの小物を主に、IBCが売り始めたのだ。それも子供のお小遣いで買える値段だ。

これは裏社会に大きな影響を与えた。

普通の品が世界に出回ったことで曰わく品の価値が下がったのだ。それを原因に世界中の有名人が制作者を捜したが何も情報が得れなかつたのだった。

そして本の1ヶ月前にまた新たな品が出回った。

それは魔導動物オバペットと呼ばれる電子ペットだった。

銀時計サイズの細工で開くとモニターとスイッチが数個ある。モニター内で好きな動物が飼えるという物だった。

これは特に女性に大いに売れた。

10種類のタイプがあり、それぞれ飼えるものが違う。

一つのタイプに3種類のペットが飼える。

しかし、これは数がとても少なく、一番人気のタイプは数十万ミラで取り引きされている。

ノエルの受け取った銀細工はそれだった。

「銀の翼と盾、それに深紅の歯車……

それに、これはオーバーペットの一番人気タイプ！？
間違いない本物のアルゲントウム製品！

本当に何者……？

軽く投げ渡されたそれを落とさないよう気に付けながらもアルクエイドが消えた方角を眺めていた。

四肢の魔獣事件を調べている特務支援課。

その四人はマインツへと向かう途中にあるローゼンベルグ工房前へと着いていた。

「ローゼンベルグ工房……？」

「ああ、此処が……」

がつちりと閉められた鉄の柵に掲げられている看板の文字を読むとエリイが納得するように呟いた。

「あら、お兄さんたちだあれ？」

彼らの後ろにスミレ色をした髪のゴシック調のドレスを来た少女が立っていた。

「君は？」

「あら、レディの名前を聞くときはまず自分から名乗るものよ？」

「ははっ、意外にませていいじゃないか、お嬢ちゃん」

「アーティスト、俺はロード」

「おへじひん」

ロイドの自己紹介を皮切りに次々と名を名乗る。

「ねぐら」、おひるね

レンはドレスの裾を軽く摘み上げてお辞儀をする。
ロイドたちはレンに最近起こっている魔獣事件について聞いてみた
が此處に来たばかりで何も知らないことのこと。
工房の主も居ないことをレンは言つとロイド達は立ち去ることに決
めた。

「それじゃ、何かあつたらいつでも頼つてくれよ?」

「じゃあ、早速だけど、聞いてもいいかしら？」

ロイドの言葉にレンは訪ねてみた。

「空のよひに蒼い髪と海のよひに深い青の瞳をしたお兄さんを知らないかしり?」

「いや、知らないな……」

「いや、俺も知らねえな」

「私もよ」

「……私もです」

「蒼い髪つてティオ助みたいな色なのか？」

「いえ、もうちょっと濃い色よ。

色々と田立つ人だから知っていると思ったのだけど……」

「君のお兄さんかい？」

「いいえ、でもそんな感じかしら」

兄と言われてくすくすと可笑しそうにレンは笑う。

「お兄さんたちが知らないならまだ帰つて来てないのかも」

「一人で大丈夫なの？」

「大丈夫よ、レンはお姉さんだから一人でお留守番出来るわ。
それじゃあね、支援課のお兄さんたち」

そう言つてレンは鉄門を潜つて行つた。
レンが通ると門は独りでに閉まつてしまつた。

「なあ、俺たちつて支援課のこと言つてないよな」

「あつ」

「クロスベルタイムズを読んで知つてたんじゃないのか？」

「そつなのかもね」

「それにしても蒼い髪ですか……」

「お、ティオ助、気になつてるのか?」

ランディが何処かニヤニヤとした顔でティオに尋ねる。

「いえ、自分と同じ髪色と言われて気になつただけです。決して、ランディさんが想像したようなことではありません」

彼らは和気藹々と談笑しながら分かれ道へと降りていった。

西クロスベル街道から市内を通り、マインツ山道を通る。その途中に現れる魔獣たちを躊躇しながら道を突き進むオーバーサイクル。

「ここの辺も大分整備されたな」

今ではバスも通る道は完璧に石畳へと整備されている。土のよう大きな振動にならずに細かい振動がアルクエイドの体に快い揺れを与える。

途中、クロスベル市内の整備のされ方はやや異常とアルクエイドは思った。

他の国を見てきたからこそ、何か違和感を感じていた。

「まあ、俺には関係ないか。

そういうや、今はクソジジイが居ないんだっけか……」

山の中腹に来た辺りでローゼンブルグ工房の方から四人組が歩いてくるのが見えた。

「ん?

うちの密にあんな奴らいたか?

アルカンシエルの新人か?」

ローゼンブルグはクロスベルの劇場の機械の作成から調整まで受け持つている。

その関係あるとアルクエイドは思った。

「なあ、君たち。

うちに何か用事か?」

アルクエイドは丁度全ての階段を降りてきたロイドたちに話しかけた。

「はい?」

「今ローゼンブルグから歩いてきただろ?」

「そうですけど……」

「おい、なんだこれは?」

「分かりません、乗用車のよつて走つて来ましたけど……」

ランティとティオがアルクノイドのオーバーサイクルに興味を示した。

「空のよつて蒼い髪に海のよつて深い青の瞳……レンかやとの言つていた人かしり?」

「レンを知つてこるのか?」

「ええ、先程工房前で会いました」

それを聞くとアルクノイドはオーバーサイクルのハンドルの下に嵌つている何かを弄り出した。

「はい、何かしら?」

するとそこから先程ロイドたちが出合つたレンの声がした。

「帰つてこら連絡しきつて俺が言えた立場じゃないな」

「その通りよ、分かつてこるじやない。
それよりも早く帰つてしまらえなにかしら?
もう3日も待つてこらのだけれど……」

「ちつ、ちつ、こ、すぐ行へ

「早くしてね。

さうやう、近くこらの救援課のお兄さんたちにお礼を言つておいて」

それを告げるとレンの声はしなくなつた。

「だ、そうだ」

「えっと、今のは……？」

「通信機を使った通話だが?」

「いえ、そういう意味じゃなくて……」

「なあなあ、それよりもよ。

兄さんが乗つていてそれを教えてくれよ

「そうですね、私も気になります。

こんなのが見たことがあります

ランディとティオは目を輝かせていた。

「オーバーサイクルだ。

また後で工房に来るといい。

その時に詳しく解説してやろう。

今は五月蠅い娘が待つててるのでね

「あのませた嬢ちゃんか」

「分かりました、明日こでも早速寄らせていただきます」

ランディ、ティオだけでなくロイドたちも目の前のモノに興味津々
だったが、今は事件を追っていることを忘れてはいなかつた。
事件を優先させるために彼らは再びマイインツへと向かい始めた。

「支援課……特務支援課か……」

Bが興味を持つた1つか。

一人、いや二人か。

赤毛ともう一人、血の臭いがするな。

ロイド・バニングス、リベールの時の奴に比べると分かり難いな。
まあ、アレは馬鹿みたいに分り易すぎただけか

彼らの後ろ姿を見ながらアルクエイドは苦笑した。

再び、エンジンをかけるとオーバーサイクルは階段を物ともせずに
登り始めた。

第1話 機械仕掛けの銀細工（後書き）

魔導一輪車と魔導動物ですが、これはエニグマの動力を内包している設定です

魔導動物の動力はクオーツで言つ機功の効果を内包してあるものが使われており、半永久的に使えるようにしてあります

第2話 機械仕掛けのお人形（前書き）

自分でも驚くほど執筆速度

その分脱字誤字が多いかもしれませんが見つけ次第随時直していきます

第2話 機械仕掛けのお人形

「いやあ～、あのオーバーサイクルって奴は格好良かつたなあ～」

ロイドたちはアルクエイドと分かれた後も彼が乗っていたオーバーサイクルに花を咲かせていた。

「それにしてもアレは何処で作られたのでしょうか？」

エンジンの小型化はまだ何処も成功していないはずです」

「あの工房なんじやないのか？」

「あそこは関係者みたいだし」

「案外そうかもしないわね。」

あの工房は何を作っているのか、良く分かつてないみたいだし……
もしかしたら、あのアルゲントウム製品もあそこで作られている
のかも知れないわね」

「アルゲントウムってあのオーバーペットのか。

でもあれはIBCが作っているんじやないのか？」

「いえ、確かにIBCが売り出していますが、私はアレがあのビルで作られているのを見たことがありません」

「それにあの人、何処かで見たことがあるよつな……」

ロイドたちが会話をしている間に途中にあるトンネルを抜けた時だつた。

狼の遠吠えが辺りに響き渡った。

「ツツー!~」

「近いぞ!~」

「彼処です」

ティオが崖上を指差す。

その先には蒼と白の毛並みを持つ狼がいた。

その狼はロイドたちを躊躇みする田で見詰めていた。

「ウオーン……ウーハルル」

敵対心もなく暫く唸るよつに吠えると崖の上へと飛び降つていった。

「え、えっと……」

「彼が言ひには『最後の欠片』の先に後はお前たち次第だ』 そつ
です」

「言葉が分かるのか、ティオ助?」

「ニコアンスだけですが……」

「私たちが知らない何かがあるところ」とね

「そのようだ、みんなあと少しだ、行くぞ!~」

「「「おひ」「」」

階段を物ともせずにオーバーサイクルで登り切ると自動で開いた門と工房の扉を確認すると乗つたまま入つていった。そのまま室内を走り、ある部屋に入り、止めた。

「お帰りなさい、マキナ」

「やつちで呼ぶんじゃない」

その部屋の片隅にある端末でレンがかなりの速さでキー・ボードを叩いていた。

「で、何しに帰つて来たんだ？」

「お爺さんにパテル＝マテルをメンテして欲しかったのよ。あなたが代わりにしてくれないかしら？」

「一応、俺の分野外なんだがな……マイスターは何処に出掛けてるんだ？」

「知らないわ。

「どうよりもそこは養子であるあなたの方が詳しいはずじゃない」

「養子と言われてもな」

レンと会話しながらもアルクエイドは近くにぶら下がっている工具一式が入っているベルトバッグを掴むとパテル＝マテルが固定している鉄錠を登る。

「久しぶりだな、パテル＝マテル」

アルクエイドが巨大人形に話しかけると目の部分が点滅し、音声暗号が鳴る。

パテル＝マテルの装甲や関節などの隙間を確かめ、動力源や配線を確認する。

最後に噴射口を覗いた時にアルクエイドはレンに向き直った。

「お前、一体コイツに何させたよ。」

問題は色々あるが、特に噴射口だ。

どれくらい長距離移動させた？」

「別に、ただ半年くらい飛び回ってただけよ」

半年と聞いてアルクエイドは頬を引き攣らせた。

「無茶させすぎだ、ド阿呆！」

アルクエイドが怒鳴つてもレンは素知らぬ顔で端末で何処かにアクセスし続けている。

「たくつ、せつかくパテル＝マテル用に作っていた物があるがこれじゃ渡せないな」

「あら、パテル＝マテルの為つて何を作つたのかしら？」

「まだ途中だ。

それにもう少し丁寧に扱わないと渡せないからな」

パテル＝マテルの噴射口に工具を突っ込みながらアルクエイドは言う。

渡せないといつ言葉にレンは可愛く頬を膨らませる。

「もう、いけずね」

「なんとでも言え」

言い争いをしているように見えなくもない一人にパテル＝マテルが幾分先ほどよりもトーンが低い音声を鳴らす。

「大丈夫よ、別に喧嘩しているわけじゃないわ」

レンの言葉に答えるよつにパテル＝マテルも音声を鳴らす。

「パテル＝マテルはレンに甘すぎだ。
ちゃんと叱ることも覚えるよ」

「私はそこまで子供じゃないわ。

もう立派なレディよ」

端末に向かっていたレンはアルクエイドの方に向くと後髪を掻き上げて髪を風で靡かされていくよつに見せる。

「はん、 もう少し体に凹凸が出来てから言つただな

アルクエイドはそんなレンを横田でちらりと見ながら鼻で笑つ。

「あら、 そんな脂肪が合つても邪魔になるだけじゃない。

そんなモノよりも若さが一番じゃない

そう言つてレンはいつの間にかアルクエイドの背後に移動していく、耳に囁いた。

「はいはい、 そういうことは嫌いなんだ。

それはあのエステルとか言つ、 ひざこ女にしてやるんだな」

アルクエイドは立ち上がりつてレンの首根っこを掴み上げ、 そつと先程までレンが座つていた端末前の椅子の方に投げる。投げられたレンはまるで猫の様に空中で一三回回転すると足からちやんと着地した。

「もひ、 レディの扱いがなつてないわよ。
相変わらず乙女心に鈍いのね

「あーはいはい、 鈍くて結構。

俺は物作つてたらそれで十分だ

アルクエイドは噴射口のメンテが終わったのか近くにある色々なものが乱雑に置かれている机に歩み寄つた。

その机の上からH-1グマに似た物体を掴むとパテル＝マテルに登りだした。

パテル＝マテルの顔近くまで来ると、 首の横にあるハッチを開けてそれと配線を幾つか繋ぎだした。

繋ぎ終るとそれ」と戻してハッチを開めた。

「レン、お前のエニグマを貸してくれ」

「エニグマって新しい方?」

「それとも古いほうかしら?」

「ペットの方だ」

レンのエニグマは普通に警察や遊撃士に配布されている通信やアーツ用のエニグマだけでなく、アルクエイドがそれに加えてオーバーペットの機能をえたエニグマ＝Mを持っているのだ。

アルクエイドはパテル＝マテルの肩から飛び降りてレンが取り出したエニグマ＝Mを掴むと、オーバーサイクルに引っ掛けられている最初に彼が持っていたバッグに手を突っ込む。そこから携帯用端末を取り出すとエニグマ＝Mと繋ぐ。

「何を入れるのかしら?」

気になつたレンはモニターを覗くとパテル＝マテルのパラメータが表示されていた。

アルクエイドがソフトを起動させるとすぐさまパーセンテージバーが現れて物の数十秒で100%と表示された。

アルクエイドはエニグマ＝Mを外すとレンに手渡した。

「通信機能の所を開けてみな

「これは……」

言われた通りに通信機能を起動すると選択肢が現れて、そこにP＝

Mと表記された物があつた。

今まで見たことがない物を選択してみるとモニターにパテル＝マテル＝モード

ルの顔が現れた

パテル＝マテルが音声を発するとモニターに文字が現れた。

「電波が届いているところならそいつがあれば何処でもパテル＝マテルと会話できるようになる」

「す」いわ、これでいつでもパテル＝マテルとお話をできるわ」

「後、その状態で少しばかり消耗が激しいがチエス、トランプなど
のミニゲームも出来るようにしておいた」

一 ありがとう！
アル、大好きよ！」

「ウエーブ」

レンは笑顔で横に立っていたアルクエイドに飛びついた。
いきなりのことに驚いてレンが飛びついてきた衝撃で少し躊躇^{よの}けた

「ほらほら、気軽に男に飛びついたりしない」

アルクエイドは首に回された腕を掴んでレンを抱き抱えると、腕を外してゆっくりと下ろした。

「とにかくお前はネットで何してんだ?」

「クロスベルで面白い子を見つけたのよ」

他にも色々と面白いことになつてゐるみたいよとレンは言つ。

「それよつもビリして急に戻つて来る」と云つたの？」

「ああ、Bから手紙が来たからな。
読んでみたら、クロスベルでリベールの時に面白いモノを見つけたとさ」

「相変わらずブルブランとは仲がいいのね。

それで彼が来るなら分かるけど、なんでアルが来たの？」

「私が我が姫君を見つけたように、親友である君の姫君が見つかると思つよつて書いてやがつたんだよ」

アルクノイドは親友の気障な言い回しに肩を竦ませながら言った。

第2話 機械仕掛けのお人形（後書き）

次回で漸く手紙が出せます
長い序章です

第3話　Bからの手紙（前書き）

これでようやく序章が終わりです

第3話　Bからの手紙

-助けて -

空高く、空気を切り裂くような速度で鷹が飛行している。

口に紙切れを咥えたまま幾つもの山を超えて飛び続けている。

鷹は帝国内の山の山頂付近に存在している小屋を目指して降下し始めた。

辺りは既に暗くなつており、本来鳥田でもともに飛ぶことが出来ない筈の夜をその鷹は飛んでいる。

小屋が見えるところまで来ると鷹は一鳴きしてから上部にある円形の切り抜かれた空間から室内へと飛び込んだ。

「ファルケか。

誰からだ？」

鷹の鳴き声が聞こえたアルクエイドは先程まで磨いていた銀片翼のペンダントを置くと鷹の止まり木へと歩いた。そこにファルケと呼ばれた鷹が止まるとすぐに咥えた手紙を取った。そこには『親愛なるAへ』と書かれていた。

「Bからか。

定例会は終わつたばかりなのに何の用事だ?」

アルクエイドとB、ブルブランは互いの芸術の価値観を語り合つ回合を年一回のペースで開いている。

アルクエイドは作った銀細工の、ブルブランは人の気高さや崇高さを語り合つ。

それは互いの思考や創作などを高めるために大いに役立つていた。

アルクエイドは止まり木の近くにある箱に手を入れて、一匹のネズミを掴むとファルケに投げた。

ファルケはネズミを咥えて飛び立て行つた。

ファルケは与えられたネズミをそのまま食べるのではなくて、山に放ち一定の距離を保ちながらネズミと追いかけっこをするのだ。普通の鷹の能力を軽く凌駕するファルケからネズミは逃げられはないのだが、それを理解しているファルケは遊んでいるのだ。

精神的にネズミを追い詰めるために朝まで追いかけるのだ。逃さずに、捉えずに、追い詰めていく。

そうやつてネズミを疲労困憊にして動けないとこりを躊躇寄つて食すのだ。

「一体その趣向は誰に似たのやら……」

アルクエイドは相棒のその趣向に肩を竦ませながら呟く。

先程まで磨いていた歪な形をした銀片翼のペンダントを掴むと手紙に封をしてある身喰らう蛇の紋章に翳す。

翳した瞬間に紋章が淡く光り、独りでに封が開いた。

その中にある紙を取り、開いて読み始めた。

「親愛なるAへ、如何お過ごしだろうか。
こないだの……」

親愛なるAへ、如何お過ごしだろうか。

こないだの定例会は實に有意義であったよ。

あの時は愛しの姫君を見付けたばかりだったので、少々熱く語つてしまつた。

そのせいか、私ばかり語つてしまつたようだ。

それで気づいたのだが、親友である君はまだ愛しの姫君を見つけ

てはいなかつたはずだね？

いやいや、別にそれを貶しているわけではないよ。

それは出会う時に出会うと言つものだ。

正しく運命という他ないのだ。

君にはまだその時が来ていないだけに過ぎないのだよ。

そこで私が今回筆を取つたのは、君に伝えたい事があつたのだよ。

クロスベルと言う都市を知つてはいるかな？

そう、君が所有している劇場があるところだ。

その都市でつい先日、警察に特務支援課と言つまるでギルドのようなことをする物が出来たのだよ。

最初はただの警察の庶民への人気取りかと思つたのだがね。

なかなか、あの都市では面白いと思ったのだよ。

政治家や犯罪者、そして他の国の思惑……

そういうた遊撃士だけでは到底入り込めない場所に入り込めると

いうのは大きな強みといえるだろう。

まだ本人達には理解はできていないみたいだがね。

遊撃士とは違つた面白さが味わえると思うよ。

そしてもう一つ、君に伝えたい事がある。

むしろこちらが本題だ。

その君の所有している劇場に興味深い新人が入つたのだよ。

とても血の臭いがする新人がね……

彼女は未だ一本の線が弱々しく感じるが、成長したらどうなるだ

ろうか？

彼女からは大きな悩みを感じる。

どうだらうか、その彼女を見てみたくはないかな？

私が思うに彼女は君にとても合つうと思うのだよ。

気紛れとしても構わない。

一目見に行つてはどうだらうか？

「アルカンシェルに新人ね……
別にどうだつていいんだけどな……」

そのままアルクエイドは手紙を今までの分を纏めている机に置こうとした。

-助けて-

「……ツツー？」

何か痛みを感じたのか、アルクエイドは軽く頭を振った。

そして、手元の手紙に目を落としてから、本来両翼であつた銀翼は斜めに欠けており、片翼となつているペンダントに目をやつた。

「そうだな、気紛れに懐かしの我が家へと帰つてみるか。
マイスターの顔でも見に行つてやるか」

そう言つて手紙を机に放り投げて、壁に掛けてある黒生地に深紅の歯車の刺繡がしてあるコートを手に取り、それの懐に銀片翼のペンダントを入れる。

製作途中の品をベルトバッグに入れて腰に付ける。

「おつと、Bに返事を出しておかないとな」

軽く手紙の返事を書いてから止まり木に貼りつけておく。
これで朝になつたらファルケが帰つてきたら、すぐにブルブランを持つて行つてくれるのだ。

最後にエニグマを掴んでから小屋を出た。

「さて、数年ぶりに帰るとするか

オーバーサイクルに跨り、ハンドルの下にある縫みにエニグマを嵌める。

動力が埋めこまれたことで起動し始める。

アルクエイドは一気に加速して山を駆け降りていった。

ブルーブランから来た手紙の最後には、後数文書かれていた。

私が我が姫君を見つけたように、親友である君の姫君が見つかると思うよ。

君にも私の芸術を真に理解できる日を願っている。

そして、今度あつた時は君の大事な銀片翼が、何故歪に欠けているのか教えてもらいたい。

君の親友、Bより

と締め括られていた。

第3話 Bからの手紙（後書き）

オーバーサイクルの見た目なのですが、ブラックロックシューターのゲームに出てくる奴にそっくりとしています

第4話 期待の新人（前書き）

なんかやたらとレンがえつちい娘になっちゃってる……
少し自重したほうが良いだろ？
ませた子供ってなかなか難しいです

第4話 期待の新人

「それでクロスベルに帰ってきたわけね」

アルクエイドが数年ぶりにクロスベルに帰る原因となつた手紙の話をレンは黙つて聞いていた。

けれど、そこがレンは気になつた。

「でも、変な話ね。

アルはブルプランに言われた程度で、帰つて来るようなタイプじやないでしょ」

「だから、言つただろう。気紛れだと」

だからこそレンはおかしいと思つた。

彼は物を作つているときに素材を買ひことや作品を売りに出すことすら基本的に代理人を使うくらい、外に出ることを面倒くさがるのだ。

ましてや、一番大事な銀片翼のペンダントを磨いている最中に出掛けるなどこれまでしたことがない。

まるで、誰かにそつなるように仕組まれたとしか……

「それで、ブルプランの言つている新人には会いには行かないの？」

「アルカンシェルにか……

だが、もうすでに夕方だしな」

「明日はあの支援課のおにいさんたちが来るんでしょう？」

だつたら、今から行きましょつよ

「行きましょつてお前も来る気か

「当然じゃない、ほり行きましょつ

レンはアルクエイドの手を掴むとオーバーサイクルの方に引っ張る。

「ウォータスなら暗くなる前に行けるわ」

「仕方ないな、暴れるなよ

アルクエイドはレンに引かれるままにウォータスと呼ばれたオーバーサイクルに近づく。

ウォータスに跨るとレンは彼の背後に乗り、腰に手を回した。

「前じゃなくていいのか?」

「別にどっちでもいいじゃない。

それに、こっちのほうがアルは嬉しいんじゃない?」

わざと胸を反らしてアルクエイドの体に密着しながらレンは言つ。その行動に溜息をつきながらアルクエイドはハンドルを握る。もう何を言つても無駄だと諦めたのだ。

「それじゃ、パテル＝マテルは留守番を頼むぞ

「良い子にしててね」

「良い子にするのはお前だわ」

アルクエイドとレンの言葉に応じてパテル＝マテルは音声を発した。

それを聞き遂げるトアルクエイドはウォーカスを発進させた。

クロスベルへの道中の魔獣は、ウォーカスの排気音や振動を感じると逃げ出すのがほとんどだが、偶に恐怖からの行動で襲いかかってくるものもいる。

それらに対してもウォーカスに嵌められているエニグマがオートで威力の弱いアーツを起動させる。

それは土属性の防壁を模したものだった。

それによって一瞬弾かれて魔獣はウォーカスに近づく前に過ぎ去ってしまう。

クロスベルの歓楽街の田舎と成っている劇場、アルカンシェル前にアルクエイドとレンは到着した。

「相変わらずキラキラと派手ね」

「ひついう物は田立つ方が都合が良いからな。わざと悪趣味な金色にしているんだ」

スタッフとレンはアルクエイドの後ろから飛び降りて、真正面からアルカンシェルを見上げる。

アルクエイドはその間にアルカンシェルのスターである、イリア・プラティエの描かれた看板の横にウォーカスを止めた。

「いつも思つただけど……」

「ちいさな興味持たれて相手するのが面倒なら、そんな目立つところに置かないほうがいいんじゃない？」

「別に隠さないといけないような事はしてないからな」

歓楽街は夕方でもそれなりに人が多いため、すでに物珍しさからちらちらと遠巻きからウォータースを見ている者が少なくない。しかし、持ち主がいるからか、あからさまに近寄つて来る者はいない。

アルクエイドがアルカンシェルの入り口に向かつて歩き出すとレンはその横に連れ添つて歩いた。

アルカンシェルの舞台には数人が舞い踊り、舞台裏にはそれに合わせて機械を移動させる。

控え室の方には小道具の修理や調整、服の解^{ほつ}れた所を縫い直したりしている。

全員が一体となつて劇を製作しているのだ。

暫く予定の物語の練習をしていると休憩に入り、各々が水を飲んだり、座つたり、雑談を始めた。

「リーシャもなかなか様になつてきたじゃない」

「本当ですか？」

この劇団のスターであるイリアが先程まで一緒に舞つていた相方に

声を掛ける。

つい先日、入ったばかりの新人であるリーシャはイリアにそう言わ
れて嬉しそうに笑う。

「ええ、入ったばかりなのに凄いじゃない」

「本当だよ。

イリアが連れてきた時には少し不安だつたけど、これなら問題な
れやうだ」

「当然じゃない、この私が直々に連れてきたんだから」

傲慢とも取れるイリアの発言だったが、それを不快に感じる者はい
ない。

それは彼女の自信の表れであるし、彼女からそう言われることがむ
しろ光栄なことなのだ。

「そう言えばリーシャは入ったばかりだからオーナーに会つたこと
はないわね」

「と云うか、半分くらいは顔も知らないんじゃないかな？」

「え？

あなたがオーナージャ無いんですか？」

「私は代理人に過ぎないよ」

いつも事務的なことをしている老紳士がオーナーだと思っているも
のが多いだろう。

リーシャもその一人で、オーナーが別にいると初めて知った。

「まあ、もう何年も顔すら出しきらないからね。

//リアだけはいつも決まった日に送られて来るんだけどね」

「私でさえも数回しか会ったことがないわよ」

「イリアさんでもそんなに少ないんですね。
どんな人なんですか？」

「知らないわよ。

私たちの中じゃ、他国のお偉いさんつてのが一番濃厚だけだね」

「何処の誰で、何してるかも誰も知らないのよ。
格好はいつも決まってるんだけどね」

「そうそう、いつも黒色のコートに深紅の歯車が描かれたのを着て
来るんだ」

オーナーだと思っていた老紳士が格好を言つと、リーシャが入り口
の方を見ながら言つた。

「入り口のあの蒼い髪の人ですか？」

「そうそう、空のように蒼い髪を……している……ね

言つていらない髪の色を言われて、入り口の方を向くと話題の人物が
そこに立っていた。

その姿を見たとき、老紳士は絶句した。

「オーナー……？」

その人物が誰であるのか理解すると、慌ててアルクエイドに駆け寄つた。

アルクエイドは劇場の中を見渡しながらイリアたちの方に向かって歩いている。

初めて中に入ったレンは興味深そうにキョロキョロしている。

「オーナー、事前に連絡を下さつたらお迎えにあがつましたの?」

「皆の練習を邪魔するわけにはいかないだろ?」

「それにそんなモノは必要ない」

「いえいえ、オーナーにそんな失礼なことは出来ませんよ」

「敬語も要りんと畜のう?」……」

言つても態度の変わらない老紳士に気付かれなによつて、アルクエイドは溜息をついた。

「お久しごりね、アーリア・アルクエイド」

「やうだな、イリア・プラティエ」

「なんでわざわざフルネームで畜のよ」

老紳士と違い、イリアは気軽にアルクエイドに声を掛ける。

「ねえ、アル。

少し中を見てきてもいいかしら?」

「皆の邪魔をしないようにな」

「もう、分かつてゐるわよ」

レンは少し頬を膨らませながらも、楽しそうな足取りで樂屋裏の方に歩いて行つた。

「それで、本田は如何な御用で？」

「いや、特に用はないが……悪かつたか？」

「いえいえ、オーナーならいつでも大歓迎です」

「そうよ、別にそういう事を気にしなくていいわよ」

あくまでも老紳士は丁寧な物腰で、イリアは友人の様に相手する」とリーシャは戸惑つていて、碌に挨拶することが出来ない。

「君が新人か」

「は、はい。

リーシャ・マオといいます」

「あら、何処から聞いてきたの？」

「新人が入つたなんてよく分かつたわね」

新人だと言い当てたアルクエイドにイリアは指摘する。

誰も連絡先を知らないから、何時誰が入つたかなどアルクエイドは知らないはずなのだ。

「一応所有者として知つてはおかないと云はなければ」

「私が入ったときはいちいち来なかつたくせに。
ダメよ、リーシャは私のものなんだから」

「イリアさん！？」

「別にどうでもいい」

突然のイリアの発言にリーシャは声をあげる。
しかし、アルクエイドは心底どうでも良さそうに咳いた。

「うわっ、失礼な人ね。

相変わらず乙女心が分かつてないわね。

そこは対抗心を見せておくものよ」

「よく言われるよ」

「だつたら治さうとしたしなさいよ」

イリアの言葉にアルクエイドは気が向いたらなと返事した。
その言葉にイリアは呆れてしまった。

「それじゃ、俺はアイツを迎えてくるよ」

「ええ、分かったわ」

アルクエイドはそれで会話を打ち切り、樂屋裏の方に歩き出した。

「そうだ、今度はどれくらい居るの？」

「さあな、数カ月はいる予定だ」

「あら、かなり長いのね。

だったら、今度私の家に寄つていりつしゃい。

良いお酒を用意しておくれわ」

「楽しみにしておくよ」

アルクエイドは背を向けたまま軽く手を振つて楽屋裏へと消えて行つた。

・あの人、全く隙がなかつた

リーシャは暫く消えたアルクエイドの背中を眺めていた。

「どうしたの、リーシャ？

あら、彼が気に入つたのかしら？」

「そ、そんなのじやあつませんよ」

意地の悪い笑顔を浮かべたイリアの言葉にリーシャは慌てて否定する。

そう言いながらも、彼女の意識は彼の消えた場所に向いたままだつた。

第4話 期待の新人（後書き）

ウォーカスはラテン語で咆哮と言う意味です

基本的にアルケエイドに関することはラテン語にしています

アルゲントウムは銀と言つ意味です

ファルケは鷹です

まんまですね……はい

第5話 傍観者達の思惑

レンを探してアルクエイドは楽屋裏を歩く。
舞台から裏へと回り、途中舞台から少しだけだが、天井から吊つて
ある機械を見る。

マイスターが調整などはしてくれてはいるが、作ったのはアルクエ
イドだから細かい調整は出来ないのだ。

アルクエイドは非常に凝った物を作るのだ。

シャンデリアのバーツから吊っている鎖の一つ一つがアルクエイド
が作成したものだ。

故に他に変えが利かない代物なのだ。

吊っているシャンデリアの昇降機も軽くだけだが、配線に不備や引
っ掛かる感覚はないか聞いた後で楽屋の方へ行く。

すると、一室からレンと数人の女性の声が聞こえてきた。

「レン、そろそろ帰るぞ」

アルクエイドはそう言いながらドアを開けて入った。

「あら、もう帰るの？」

室内には数人の女性に囲まれたレンが、先ほどとは違つドレスを着
てくるくると回っていた。

「えー、もう帰っちゃうの？」

「もつとこまじょうよ

数人の女性が不満の声を漏らしながら目でアルクエイドを睨んでく

る。

アルクエイドがオーナーだと知っている女性は一人だけいるが、他の娘達とアルクエイドを交互に見ながらハラハラしている。

「ごめんなさいね。
もう帰らないと」

レンはアルクエイドが見ているのにも関わらずに、脱ぎ始めた。アルクエイドはレンの肩が見え始めた辺りで外に出ようと背を向けた。

「外で待つている」

それだけ言つとレンの素肌を一部だけだが見たが、気にした素振りを見せずに一言だけ言つてドアを閉めた。

「もう、少しくらい焦つてくれてもいいじゃない」

アルクエイドの変わらない態度に、レンは不満気に頬を膨らませた。その姿に回りにいた女性たちは可愛いと言いながらレンに抱きついた。

アルクエイドとレンがアルカンシェルから出てきた頃にはもうすでに太陽は沈んで夜になっていた。
アルカンシェルは下からライトアップされ、夜でも一層目立つていた。

「なかなか楽しかったようだな」

いつもよりも若干楽しそうな足取りをしているレンを見てアルクエイドはさつ言つた。

「わうね、結構楽しかったわ」

アルクエイドの言葉に答えるながら来たときと同じようにウォーカスに跨るアルクエイドの背後に乗つた。

「今から行けば支援課のおにいさんたちの大物取りが見られるかしら？」

「全力で向かつてやるよ。
ギリギリ間に合つだろ」

夜中まで時間があるからなとアルクエイドは答えて、マインツ方向にウォーカスを向ける。

ギュルギュルと地面を擦りながら旋回して、マインツ山道へ一気に加速する。

暗い夜道をウォーカスのライトだけで前を確かめて疾走する。途中にいる魔獣が逃げる間もなく、ウォーカスの前に展開された槍型の防壁に無理矢理弾き飛ばされていく。

異常な速度だというのに、レンはそれを楽しんでいるかのように髪を靡かせながら気持よさそうに手を細めている。

マインツの手前にある門が閉められた旧坑道の前まで来ると人に見つからないように物陰にウォーカスを止めた。

アルクエイドはレンを抱えるとさりげにその上へと飛び上がって行った。

見晴らしが良く、マインツが見える場所に行くとそこには先客が居た。

「これはこれは、今宵は殲滅天使だけが来るものかと思つていたのだがな」

先客の男はアルクエイドを警戒してか、剣の柄に手を掛けていた。

「何もしねえから落ち着いてくれ。

あんたも殺りに来たわけじゃないだろ」

男の横に立つと、抱えていたレンを下ろした。

アルクエイドは男に気にせず、そのまま横に片膝を立てて座った。

物見遊山でもせんと言わんばかりに立てた膝の上に肘をついて手の甲に顎を乗せる。

すると、レンが当然と言わんばかりに自然とアルクエイドの横にしている片膝に座る。

「噂に名高い風の剣聖、アリオス・マクレインに出会えるとはな

「名を知られてるのは光榮だが……」

アリオスは語尾をやや強めると剣の柄を握った手に少しだけ力を込めた。

「この地に災いを持ち込むといつならば、容赦はせぬぞ

「心配しなくとも私たちは何もしないわ」

アリオスの挑発と宣告にレンは笑つて答える。

それは言葉通り何もしないから笑つていられるのが、それとも容赦されなくても余裕で対処出来るから笑つているのか……
レンが笑つていると宿からロイドたちが出てきて大型の魔獣とマフニアを取り押さえた。

「どうやら終わったようだな」

「そのようだ。

しかし、まだまだ未熟だ」

「最初はそんなモノじゃないかしら」

「Bが興味を持つのも頷けるかもな」

「アルも興味を持ったの？」

少しだけなとアルク＝イドは答えると頬を少しだけ緩めた。
そして、とても小さな押し殺したようなクククといつ笑い声がレンには聞こえた。

暫く眺めていると崖下の山道に警備隊の装甲車が数台やって来た。

「これでクロスベル郊外を騒がせていた魔獣事件も片付いたな」

「あのワンちゃんたちはあまり可愛くないわね

「戦闘魔獣に愛嬌はいらんだろ」

「そりゃしら。

あつたほうが和むじやない

「相手を和ましむべつある」

レンとアルクエイドが会話しているとアリオスは興味は失せたのか、背を向けて歩き出した。

「あら、 もう帰るのかしら？」

「ああ……

「そういえばこちらの御仁」の名を聞いていなかつたな」

数歩歩いた所でアリオスはアルクエイドへ向き直つた。

「……レギス」

「承知した」

名を聞いたアリオスは再び歩き出さうとしたが、アルクエイドな呼び止められた。

「俺も聞きたいことが有るんだがいいか？」

「内容による」

「あなたが頻繁に病院に通つてるのは嫁でも入院しているのか？」

「私が通つてているのは知つていてるのにその先は知らぬのか」

「俺は最低限のプライバシーは踏み込まない様にしてんだよ」

本当に知らないのか、それとも言質を取つて確認したのか分からな

いが、アルクエイドの真意を探るよつた。アリオスはアルクエイドを見詰める。

「……娘だ。

目が見えなくて入院させている

「わづか、なら明日……」

「明日は支援課のお兄さん達が来るでしょう」

「だったな、明後日ローベンベルグ工房に来てくれ

「素直に行くと思つていいのか?」

「無駄足にはさせとよ」

「……気が向いたらな

そう言つて、アリオスは崖下へ降りていった。

「2人とも素直じゃないのね」

アリオスとアルクエイドの会話が面白かったのか、レンはくすくすと笑う。

「支援課はびひり今夜はマインツで過ごすよつだな

「夜も遅いからね、私も眠くなつてきたわ」

「それじゃ、俺らも帰るとするか

欠伸を噛んだレンを来たときと同じように抱えて、アルクエイドは崖下へ飛び降りた。

彼ら三人がいた場所、そことは違う場所で支援課の行動を見ていた者がいた。

その蒼と白の毛並みを持つ狼は三人の行動も気にしていた。特に支援課がマフィアを抑えた後は隠す氣すらなく、彼らを見ていた。無論三人はそれに気づいていたが、特に気にしてはいなかつた。崖下へと降りたアルクエイドはレンを抱えたまま、ウォーカスに乗つた。

発進する時に少しだけその狼がいた場所に視線を送つたが、すぐさま視線を戻して山道を駆け降りた。

睡たげなレンを気遣つてか、幾分速度を抑えて出来るだけ振動や排気音が鳴らないように走行した。

第6話 かつて何処かで（前書き）

何か良いサブタイ考えてたらいつの間にか寝てました
そのまま特に思いつかずに微妙なのになってしまいました

ヒロインって誰がいいんでしょうか？

なしならなしでいいんですけど、候補はティオ、リーシャ後レンの
誰かで考へてるんですが誰がいいでしょうか？
一応三人とも設定は考へています

第6話 かつて何処かで

「目…か。

目が駄目なら耳で出来ることか……」

深夜の工房でアルクエイドは端末を弄る。

「噂通りならアリオスとほとんど会話すらできてないだろ? な。データデバイスはエニグマで十分か。後は集音と録音、声のトーンか。

……それと一つだけサプライズだな」

アルクエイドは実際に楽しそうに元を歪ませている。

「これで十分か

背もたれに持たれながら端末に接続されたエニグマを取り外す。

「……ん?

珍しいな、レンが足跡を残したまゝにするとは

画面内には毎間にレンが弄っていた時のままの物が幾つか残つていた。

「いや、敢えて残しているのか。

面白い子……か。

他には何を見ていた?」

アルクエイドは敢えてレンが目を付けていた面白い子を見ずに他の

を見始めた。

「ルバー・チエ、黒月、何故マフィア…
シユヴァルツ・オークション?
黒の競売場?」

なんでレンがこれを……なにツツ!?

レンが残していたままのマフィア関連の情報。

その中の裏社会のオークションの一つである、シユヴァルツ・オーケション。

その出品予定のリストの中に二つばかり気になつたのが入っていた。

「糞が……

まだ俺はそこに出した覚えはないぞ。

一体何処から持つてきやがった……」

端末の置かれた机を壊さんとばかりに力を込めて叩く。

「ルバー・チエ会長マルゴー!……」

アルクニードは冷たい目でモニターに表示されたルバー・チエ会長を睨んでいた。

翌朝、マイシンジの宿場から出てきたロイドたちは警備隊に捕らえた

マフィアを受け渡していた。

しかし、クロスベルのある議員とルバーチェが繋がっていて、ミハを出せば彼らはすぐに釈放されるということを聞くと肩を落とした。

「確かに無駄なことかと思えるかも知れないけど、決して無駄ではないからこれからも頑張ってね。

ノエル、彼らをクロスベル市まで送つてあげて頂戴

「イエス・マム！」

上司であるソーニャ副司令に言われてノエルはすぐさま敬礼して答える。

彼女はそのままノエルが支援課を送るための一台の車を残して、マフィアを連れて先に山を降りていった。

「それでは皆様、私が責任を持つて送り届けさせて頂きます！」

ノエルがそう張り切つてロイドたちに言つて微妙な顔をして見合わせた。

「どうされました？」

「いや、なあ……」

「ああ、ちよっとな」

怪訝な顔をしたロイドたちにノエルは聞いたが要領を得ない答えしか返つて来なかつた。

「実は今日はこの後、ローゼンベルグ工房に行く予定なのです」

「ローゼンベルグ工房ですか？」

「ええ、だから途中の分かれ道まで送つてもらえないかしら？」

「はい、分かりました！」

エリイの言葉にノエルは敬礼で答えると、五人は車へと乗り込んだ。ノエルは全員が乗ったのを確認したら車を発進させた。

「皆さんはどうしてローゼンベルグへ？」

「昨日あつた人に招待されたんだ」

「招待？」

「ローゼンベルグ工房へ？」

「ええ、その人がとても興味深い物に乗つていたので、それを見ていたら来たら詳しく説明すると言われたので」

「へえー、実は私も昨日、初めて見るものに乗つていた人がいるんですよ」

「お、それはオーバーサイクルって奴か？」

「そうなんですよ、支援課の皆さんも会つたんですか？」

「ええ、今日はそれで伺つことになつたの」

「誰も入つたことのないあの工房にですか。」

羨ましいですね、私も行つてみたいです

「それじゃ、ノエルちゃんも行つてみるか？」

「そうしたいのはやまやまですが、仕事がありますので……」

「ところでノエルさん。

先程から気になつてゐるのですが、その腰の銀細工は……」

ティオは腰に付けられてゐる銀細工が出会つた時から気になつていた。

「これですか？

実はこれ、オーバーペットの一番人気タイプなんですよ

「ええ！？」

「一個數十万ミリは下らないといつてア物じやないか！？」

「ノエルさん、一体それを何処で？」

エリイやランディがその事実に驚きの声を上げたがティオは至つて冷静で聞いた。

「実はその昨日あつた人に迷惑料だつて一一つも貰つたんです」

「一一つも！？」

「それで、そのもう一つは？」

「その人の審査をした子に渡してあります。
その子の分だって言われましたので……」

「そうですか、残念です」

「ティオ助、まだあつたら貰うつもりだつたのか……」

ティオのその言葉に嘘は苦笑した。

「でも、ティオは確かに持つていなかつたか？」

「はい、持つてはいますが私が欲しかつたタイプではないです。
全く、所長も使えませんね。

どうせ持つてくれるなら私が欲しい物を持ってきて欲しいです」

「いやいや、それでも頑張つたんだと思つよ」

ティオは持つてきてくれたロバーツ所長に対しても大きく溜め息をついた。

ティオの辛辣な言葉にロイドは必死にフォローする。

「しかし、それを簡単に渡すなんて一体何者なんだ？」

「そうね、ローゼンベルグの関係者で珍しい物を幾つも持つている
なんて……」

「案外それを作つてる奴だつたりしてな

「まさか」

「……………」

ランティの言葉に全員が笑い出す。

言ったランティ自身も本気で言っているわけではなく、すぐにだよ
なあと言いながら笑う。

その中でティオだけは何か難しい顔をして黙っていた。

「それでは皆様、自分はこれで失礼します」

「ああ、ありがとう」

ローゼンベルグ工房への分かれ道まで来たロイドたちは、装甲車から降りてノエルを見送った。

「それじゃ、向かうとするか」

「わづね」

「……………」

「どうした、ティオ？」

「いえ、なんでもありません」

ロイドは先程からずっと黙つて居るティオに声をかけるがはぐらかされてしまった。

- 銀細工に蒼い髪……やつぱり何処かで -

ロイドたちは階段を登り、工房前の門へと着いた。

庭の一角には工具を広げてウォーカスを整備しているアルクエイドと、その背中に凭れるようにエニグマ＝Mを触つて居るレンの姿があつた。

ロイドたちの姿を見ると立ち上がりてドレスを少し持ち上げてお辞儀をした。

「よひーん、ローゼンベルグ工房へ。

歓迎致しますわ、特務支援課の皆様」

レンが頭を上げると閉められていた鉄門が独りでに開いた。ロイドたちは勝手に開いた門に戸惑いながらも、彼らの方に歩み寄つた。

互いに自己紹介を終えた後、ロイドとヒリイはレン、ティオとランディはアルクエイドと話していた。

「なるほど、エニグマを動力に使うことで力不足を補つて居るわけ

ですか

「速度を出すとその分消耗は激しいが、セキュリティーは万全にな
る」

「個体識別番号でロックをかけるわけですね?」

「そうだ、後エニグマのアーツを使うことで事故を極力防ぐことも
出来る」

「しかし、オートで使うには些か危険じゃないですか?」

「現状は威力を下げる相手に怪我させない様にするしかない」

「なるほど……」

何かを思案しているティオに変わって、今度はランティが話しかけ
た。

「なあなあ、俺も乗つてみたいんだが

「乗るのは構わないが、乗用車の免許は持つているのか?」

「あー、持つてねーな」

「一応乗用車として登録しているから、乗らない方がいいだろ?」

「今は警察だしな、皆に迷惑かけるわけにはいかないか」

「一人用だしな、レンタくらいなら一緒に乗れなくはないが……」

「……だったら、私を乗せてはくれませんか？」

「構わんぞ」

「かあ～つ、羨ましいぞティオ助」

アルクエイドはウォーカスに跨るとティオの手を引っ張つて後ろに乗せた。

手を引かれるこの感覚、やつぱり何処かで

アルクエイドはティオを乗せてウォーカスを発進させ、階段を駆け下りた。

「ア、ア、ア、アアア、ア、階段は無茶です！」

一段ずつ揺れの振動がかなりくるのか、ティオは悲鳴を上げていた。

「俺も免許取ろうかなあ」

もつ見えなくなつた彼らを羨ましく思いながら、ランディは呟いた。

「ち、ちょっと、と止めと止めておこう。」

ティオの制止の要求を聞かずにアルクエイドは一気に階段を駆け下りた。

「どうした？」

分かれ道に着いてから漸くアルクエイドはウォークスを止めた。

「はあはあ……はあつ……

どうもこうも、階段を降りるなんて無茶です！」

階段の振動で落とされないように、必死にしがみつるのがかなりキツかったのか、ティオは息も絶え絶えだった。

「レンはいつも平氣そうにしていいんだ？」

「レンちゃんが……？」

後で口シを聞いておきます」

「そうしろ。

取り敢えず、マインシまで往復するか

「分かりました」

アルクエイドはティオの返事を聞くと、ウォークスをマインシへ向けて発進した。

「これは……

普通に動かすのでもアーツが発動している？」

ティオはウォークスの周りに微かに力を感じた。

力はウォークスの先端から流れていった。

「よく気付いたな。

空気抵抗を出来るだけ少なくするためだ。

そんな小難しいことは考えずに今は乗り心地を楽しんでろ」

「……そうします

本音を言えればまだまだ聞きたいことだらけだが、聞いても答えないだろうとティオは思った。

「少し加速するぞ」

その言葉に答えるに、ティオはアルクエイドの背中を掴む力を少しだけ強めた。

アルクエイドは服が引っ張られる感じが強くなつたことを感じると加速した。

それに伴い、心地よい振動がティオにも伝わっていく。

マインツの前に来た辺りで、ティオはアルクエイドに話しかけた。

「あの、何処かであつたことが無いですか？」

「俺とお前がかかる？」

「そうです」

「……いや、記憶にないな」

「……そうですか」

そのまま、ティオは黙ってしまった。

暫くの間走つて分かれ道が見える辺りまで戻つてくると、コツンとアルクエイドの背中に何かがぶつかって重みが加わった。

それが何か瞬時に理解して、幾分速度を落としてそのまま再びマインツ方向へ向かつた。

「寝始めたか……

レンもそうだったが、女ってのは器用なもんだな……」

ゆつくりと、程良く頬を撫でる風を感じながらアルクエイドは何度も往復していた。

第7話 楽園の終わり（前書き）

感想でアルクエイドの年を聞かれたので書いておきます

アルクエイドは19歳です

ロイド、ヒリイが18なんでその上ですね

生まれは共和国です

マイスターに拾われたことはそのまま本編で書きます

第7話 楽園の終わり

「悪いレーヴン、遅れた」

「遅かつたな」

「しつこいのがいてな、うざいからバラしてきた。ガキの田の前でやつしまつたけど大丈夫かね？」

「芸術家というのはそういうもののじやないのか？ その子供には同情するな」

「俺とアレと一緒にされるのは心外なのだが」

「自分の価値観に無理矢理理解させよつとする輩といつ意味だ」

「喧嘩売つてんだろ、な？」

「そんなことよつ……」

「てめえ……

まあいい、今は胸糞悪い『樂園』潰しだ

「」の世に樂園など無いことを教えてやるわ」

そこには銀と蒼、黒の三人がいた。

黒は依然と口を開かず、銀は撫然と冷静に、蒼はほとつもなく苛立つていた。

黒と銀は剣を構え、蒼は袖からジャラジャラと鎖を垂らす。

蒼が鎖をドアにぶつけて力づくで吹き飛ばす。
それを合図に三人は館の中へ踏み込んだ。

「この日、樂園は消え去った

「もつかい答えて貰おうか？

これの何処が芸術なんだ、ああ？」

「…………」

「放してやれ、もつか既に死んでいる」

「チツ、胸糞悪い。

アレもそつだつたが、こつちもつぜえ。

生き残りはいたか？」

「一人だけな」

「こいつは……」

「この傷は恐らく自分で付けたものだらう」

「そうじやないと耐えられなかつたか。

裏の世界は何処も彼処も狂つてなきややつてられないよな

自嘲する笑みで蒼が言つと銀は聞く。

「まだ、後悔しているのか、この世界に入ったことを

「別にしてないよ。」

「マイスターにや感謝してるし、生か死かって言われたら生だろ、

普通」

「お前はまだ子供なんだ、泣きたい時は泣けばいい

「涙なんざ、友達だちに殺されかけた時に枯れたつての……

俺は覚えちゃいないがな……」

「だからアルはレンの王子様なの」

「ははっ、王子様か」

「レンはお姫様なのだから王子様なの」

「ふふ、羨ましいわね」

アルクエイドがティオを乗せて駆け下りると、レンはローディヒ
リイに馴れ初めを語つていた。

無論大幅にぼかしてはいるのだが……

「ア、ア、ア、アアア、ア、階段は無茶です！」

それを微笑ましく笑つていると、悲痛な声が聞こえてきた。

「…………」

「なんだ、今の？」

「あ、ああ……？」

「もう、レン以外の人を乗せるか？……」

「えっと、レンちゃん。
今つて……」

「アルがウォークスにレン以外を乗せたら皆叫ぶのよ。
すつごい乗り心地が良いのに」

アルクエイドがレン以外を乗せているからなのか、それともウォークスに乗っているのに悲鳴を上げているから不満なのか、レンは面白くなさそうな顔をしていた。

「ねえレンちゃん。

アルゲントウム製品つてもしかして此処で作られているの？」

「いいえ、でも作っている人なら知つているわ

「本当なの！？」

「誰なんだ！？」

「誰つてアルよ？」

「あの人ガー!?」

「マジかよ……」

ティオとアルクエイドが走り去つて暇になつたのがランディもロイド達の方に寄つて来ていた。

「だから気軽に一つも渡したのか……」

「私のこれもアルが作ってくれたのよ」

そつまつてレンは懐からエニグマ＝Mを取り出す。
エニグマ＝Mはアルクエイドが作ったものでレンしか持つていらないのだ。

オーバーペットはもともとアルクエイドがパテル＝マテルのために作っていたものだ。

しかし、まだ完成はしておらず、完成のためのデータ収集のために売りだしたものだった。

「エニグマにオーバーペットが入つてゐる……」

「つてか、これ端末みたいに画面通話も出来るぞー!？」

「何者なんだ、あの人は……」

ロイドたちが驚愕する中でレンは終始笑っていた。

夕方になつてアルクエイドはティオを抱えて歩いて階段を登つてきた。

ウォームスに乗つたまま登ると振動で目を覚まされても困るし、落ちたら少々の怪我では済まないからだ。

結局、ティオが一度も目を覚ます事なく、ローゼンベルグ工房に戻ってきた。

「……ん…あ？」

「起きたか」

アルクエイドの背に乗せられていたティオは門が見える位置まで来るとよけいに目を覚ました。

「……っ！？」

「も、もももう大丈夫です、下ろしてくださいー！」

自分が何処で寝ていたか気づくとティオは慌ててアルクエイドの背から下りた。

「……不覚です」

ティオは大きく肩を落としていた。

「小さい体で特務支援課を頑張っているんだ。
疲れていて当然だらう」

「小さいは余計です」

「悪かった」

アルクエイドの言葉に少しだけ機嫌を悪くしたように見えたティオ
は早足で工房へ戻つていった。
しかし、ティオの口元は少しだけだが、緩んでいた。

その後、ロイドたちは彼らを別れ、クロスベル市へ戻った。
アルクエイドとレンは彼らの背中が見えなくなるまで見送つていた。

「レン、後でティオ・プラターの経歴を調べておいてくれ」

「あら、急に女の子を調べてくれなんて……惚れたの？」

「…………」

「冗談よ冗談」

「ティオ・ブライターに何処かで会つたことはないかと言われたんだ」

「ふうん、それは気になるわね。

引き籠もりのあなたに出来つなんてよつぱりどよ」

「やがま
喧^{やかま}しい」

アルクエイドは相手に出来んと言わんばかりに工房の中へ入つていった。

レンはそんな彼を気にせずに、ロイドたちを見ていた。

「ふふ、これはちよつと私たちも面白くなりそうね

レンは嬉しそうこつまでも笑つっていた。

第8話 余計な荷物（前書き）

何故かレンとの絡みが書きやすいんですね
そのためなぜかレンがややえっちい娘に……

わっと今回は全く出でさせておませんが

第8話 余計な荷物

ロイドたちが支援課に戻るとそこにはあの蒼と銀の毛並みを持つ狼がいた。

疑惑を晴らした礼としてサポートするために住み込み、警察犬として登録された。

既にあの魔獣事件から一週間が経っていた。
特に目立った事件もなく、支援課のメンバーは比較的平和な日々を過ごしていた。

「また駄目でした」

そう言つて、無表情な顔でティオは事務所に入ってきた。

「よくあれだけ断られていながら、ティオ助も毎日通えるな」

既にこの光景は珍しくなくなっていた。

「初めてそう言われて入つてきたときは何かと思つたよな」

「そうね、あからさまに肩を落として入つて来たわよね」

ローゼンベルグ工房に行つた次の日からティオは通い始めた。
初日の落ち込み具合は全員が驚愕した。
何があったのか聞くと頼みを断られたという。
今ではさほど落ち込んだ様子はなく、皆もまたかと言つて苦笑していた。

「けど、毎日何処に行つているんだ?」

「初日はHBCのビルに調べ物へ、次の日からはローゼンベルグ工房です」

「ローゼンベルグへ？
何しに行っているんだ？」

「そんなの決まってるじゃないか。
あのオーバーペットを譲つて貰いにだる」

「ランディさんは失礼です。
私がそこまで欲しがっていると思つているのですか」

「そうだぞランディ。
いくつ……」

「まあ、断られましたが……」

「って頼んだのかよー。」

「はは、ほらな」

「はあ……

あまり迷惑かけないようにな

「分かつてます」

やつぱり、ロイドはトントンファーの整備に、ランディはグラビア雑誌に戻った。

エリイは自室へと階段を上つてこつた。

ツァイトはいつも通り屋上で日を浴びているだらつ。

ティオもエリイに続いて階段を上つていった。

自室に入ったティオは机の上に置いてある紙束に目を通す。

そこにはアルクエイドについて書かれていた。

しかし、アルクエイドについて書かれていることは少なく、一枚目の半分にも満たない。

他の紙はオーバーペット等のアルゲントウム製品とオーバーサイクルについてだつた。

「IBCのネットワークでも何もないなんて……」

最初は自分の閲覧できないとこに保存されているのだと考えて、エイオンシステムを駆使してまで調べたが掠りすらしなかつた。

だから、次の日からは本人に聞きに行つたが、あなたは何者ですか、なんて聞けるはずもなく、アルクエイドについて分かることは何も増えなかつた。

分かつていることは名前とアルゲントウム製品とオーバーサイクルを作つたことだけ……

「謎過ぎです、怪しそぎます……」

咳きながらティオはベットに飛び込んだ。

ギシギシとベットは軋むが気にせずティオは転がる。そして、枕元にあるみつしい人形を抱き寄せた。

「私はあの人かどうか確かめたいだけなのに……」

ティオの脳裏に甦るは忌まわしい記憶。

あれから長いときが経つが未だ忘れることは出来ない。

それはロイドの兄である、ガイ・バーニングスが助けに来るよりも前

のことだった。

最初は夢だと思っていた。

いや、今でもアレは夢だつたんじやないか？

辛い日々から逃避するために見た幻だつたんじやないか？
そう思う。

-確かにあの人は蒼い髪に銀色の何かを持つていた -

何度も夢じやないと信じながら……紅く染められた光景を……
忌まわしい記憶に体力を消耗したティオは何時の間にか寝付いていた。

その頬には一筋の涙が流れていった。

「これがティオ・プラターの経歴か。

幼少の頃に失踪、三年後にウルスラ病院に入院、その数ヶ月後に
家に帰る。

しかし、馴染めずに戦闘士團に出奔。

そして、今回オーバルスタッフのデータ採集のため特務支援課に
協力……」

レンが集めた情報を読み上げて、忌々しげに紙を机に放り投げる。

「Jの失踪の間の場所と内容、出奔の理由は無いのか?」

「私が調べた限り無かつたわ」

アルクエイドはレンの返事に苛立たしく髪をかき揚げる。

それは知りたいことが無いからではなく、恐らくティオが他人に知られたくないことを知つてしまつたからだ。

しかし、レンは嘘をついていた。

レンはちゃんとティオが何に拉致されていたのか、知つている。

不幸にも、それはレンが拉致された集団の一部が楽園だったからだ。アルクエイドはレンの過去を聞いたことはない。

それはレンが聞かれたくないと思つていても思つていたからだ。実際、レンはそれをアルクエイドに知られたくなかった。

一度それに繋がる情報を渡せば、すぐに知るだろう。だからそれを渡せなかつた。

アルクエイドも他からレンの過去を聞くのは良しとしないだろう。本人が知られたくないなら尚更だ。

ティオの過去も細かいとここまで知る気はなかつた。

ただ何処で会う可能性があつたか知りたかつただけだ。

「迂闊だつたか……」

ヤバい可能性は大いにあつたのだ。

あの年で警察、しかも特務支援課という特殊な場所、そしてアルクエイドに会つたことが有るかもしねり。

これだけでティオに何かあると知るには十分だつたのだ。

「自分の荷物、勝手に背負われちゃ 気味が悪いよな」

アルクエイドは目の前のレンが調べたティオ・プラターの経験を握

りつぶした。

「少し出かけてくる」

「何処に行くの？」

「HBC本社」

「こつてらつしゃい

珍しくウォータスに乗りずに、アルクエイドは「一トを掴むと上房から出ていった。

第9話 畫く死神

アルクエイドは歓楽街から裏通り、広場から東通りへと周り、港湾区歩いていた。

「ルバー・チエ、黒月、黒の競売場、政治に金融か……人の闇と言うよりかは欲の集合だな」

アルクエイドは皮肉な笑みを浮かべながら一通りのクロスベル市を見ていた。

「特務支援課が出来るわけだ。

確かに遊撃士だけじゃ踏み込めない場所が多くすぎる」

ローゼンベルグ工房に来てから一週間経つが、アルクエイドは初めてクロスベル市を散策していた。

「だが、欲の中にこそ、闇は紛れやすい。
欲の方が目立つからな」

アルクエイドは口元を歪めながら、IBCビルの正面に辿り着いた。

「俺も欲に紛れさせてもらおう」

ガラスのドアを潜り、受付へと真っ直ぐ歩く。

「ディーター・クロイス社長と面会したい」

「社長と……？」

訝しむ受付嬢はアルクエイドを品定めするかのよほな顔で見る。いきなり社長と面会したいなどと言つてきただら当然の話だ。

「失礼ながら、どうやら様でしょつか？」

「Aが来たと言えば分かる」

その視線を全く気にせずに答える。

その答えを怪しく思いながらも、受付嬢は社長と連絡を取った。

「社長、今受付にAと名乗る方がお見えになつております。社長と面会したいと仰っていますが……

畏まりました」

如何にも事務的な応答をした受付嬢はアルクエイドの方に一枚のカードキーを差し出した。

「此方のカードキーをお使い下さい。

Hレベーターの端末に御使い下さい」

アルクエイドは受付嬢の話を全部聞かずに、カードキーを手渡されるところをHレベーターに入つていった。

そんなアルクエイドを怪しく思いながらも、常務へと戻つた。

「ディーターは社長室で仕事をしていた。
そこに音もなくアルクエイドは現れた。

「君はどうしても順序を踏むのに最後で飛ばすんだい？」

扉が開かれる事なく、ディーターの座つている前に突然現れたアルクエイドに驚くことなく聞いた。

「別にいつもて訳じやないだろ」

「君がそう入つてくるときはいつも面倒事を持つてくるだろ？」

ディーターはアルクエイドに見向きもせずに書類に書き込んでいく。

「それで、今日はどんな用だい？」

「黒の競売場……

「これの招待状が欲しい」

「…………」

その発言を聞いたとき、ディーターは依然と動いていた手が止まつた。

「先刻私が言つた言葉に偽りないじゃないか」

「否定した覚えはないが？」

「本当に君は嫌な性格をしているね」

「お前が言つた」

元から和氣藹々等といった雰囲気ではなかつたが、一気に殺伐とした空氣に変わる。

「何故それが必要なんだい？」

「気になることがあつてな」

「しかし、私にも……」

「いいじゃないですか、お父様」

彼らの会話を聞いていた一人の少女が居た。
彼女はそう言いながらドアを開いた。

「彼に隠し事をしても得はないでしょ。うむしろ、彼から借りを作るチャンスではなくて？
一度いいことに複数来ている訳ですし」

ディーターの娘であるマリアベルにそう言われて、溜め息をつきながら彼は机の引き出しから一通の手紙を取り出した。

「借りはそのうち返す。

後、アレのデータを貰つて帰るからな」

それを受け取つてアルクエイドは入つてきたとおり回りよつて音もなく消えた。

「彼の要求はいつも無茶ばかりだな

「いいじゃありませんか、彼には得させてもらっているのですから」

「最も、アレのデータで何をしているのか分からぬがね」

「私たちと組んで利がある限り、彼は裏切りませんわ」

ディーターは厄介^{厄介}ことを抱えたように苦惱していたが、それとは逆にマリアベルは頬を歪ませていた。

マリアベルはそう言つたが、ディーターはそうは思はない。

彼は独自の正義、思想で動いていたのだ。

そういう輩が一番厄介だというのを知つてゐるのだ。
そういう輩に限つて、どんなに逆境でも、可能性がなくとも、死に

かけても、絶対に諦めないし、挫けない。

だからこそ、そういう時に何をするか分からぬのだ。

だからディーターはアルクエイドを信用しない。

ウルスラ病院の一室。

ここにアリオス・マクレインの娘、シズク・マクレインは入院して
いた。

彼女の部屋には少女特有のぬいぐるみなどが存在していなかつた。
殺風景な病室を彩るのは花瓶に添えられた花くらいだつた。

「それでね、こないだ来た支援課の人たちが……」

「そうか」

彼女は彼女以外誰もいない部屋で一人喋っていた。

まるでそこに父親が居るかのように話す。

とは言つても、彼女が寂しさからおかしくなったというわけではない。

彼女の寝台の近くにある机の上にある機械が置かれていた。

そこからは父親の声が聞こえていた。

それはシズクの話に相槌を打ち続けていた。

楽しい話にはアリオスの声も嬉しそうに、シズクの声のトーンに合わせてアリオスの声も変わっていた。

その機械はロイドたちが来た次の日にアリオスの声を録つて、創り上げたものだ。

その為に、アリオスは異常な量の質問を答えさせられていた。

さらにその答えを元に、アリオスの性格を把握して声を入れたのだ。そして、シズクの話に相槌だけだが、出来るようになつたのだ。この機械はそれだけでなく、シズクの会話を同時に録音している。仕事の休みのときに入るアリオスが機械の中にあるメモリを入れ替えて、後でアリオスが聞けるようになっている。

最初は抵抗があつたシズクも今となつては嬉々としてそれに話しかけている。

時には看護士達との会話を録つたりしている。

シズクはたまにしか来れないアリオスと疑似会話とはいえ、楽しめるようになつていた。

ある意味、ビデオレターみたいなものだが、相槌だけとは言え、会話を楽しめることに違いはなかつた。

長いこと入院しているからある程度寂しさには慣れているとはいえる、まだまだ親に甘えたいのだ。

そこにコレをプレゼントしてくれた。

差はあるとは言え会話出来る。

休日には一緒に出掛けで会話を出来るがし足りないのだ。

だが、アルクエイドは親切心だけでこれをアリオスに渡したのではない。

・御用・が、形図の「ル」

た原因など

「やああああああああああああああッ！？」

夜闇に悲鳴が響く。

最近、夜に人が死ぬ事件が頻発していました。

いた。

充満されていった。

に、その場で嘔吐したといつ。

今夜の被害者はこの男だった。

迫り来るソレから必死に逃げようと走りまくる。

道端の障害物を蹴り飛ばしながら、時にはそれに足を盗られて転び

ながらも逃げ続ける。

それでもソレからは逃げれない。

自分を転ばしたもの投げても避けられる、当たらぬ。
ゆらゆらと揺れながらソレは一定の距離を保つ。
縮まる」とも長くなる」ともない。

「なんでッ、追いかけてくるんだあああああーー?」

ソレは一言も発しない。

いや、人であるのかさえ分からぬ。

ソレからは人らしさが微塵も感じられない。
時に何かが体を裂くが、獲物は分からぬ。

「ぐあッッ、ややめ、やめてくれ、い嫌、嫌だあああああああ
あああああー!」

この日新たに一つのバラバラ死体が出来た。

第10話 欠けた支援課（前書き）

今回最初が結構グロイです

注意です

ひどすぎるなら今後は出来るだけ描写を抑えます

第10話 欠けた支援課

夕方に一時的に寝付いてしまい、夕食の時に起こされたとは言え、睡眠とは十分取つてしまつと勝手に起きてしまうものだ。

ティオはまだ外が白い光で明るくなつてきている早朝に目覚めた。皆が起きる時間までベットで転がつていようとしたが、昨日思い出した光景が幾度と甦る。

体を動かせば多少は気が晴れると思ったティオはもそもそとベッドから出た。

「やつぱりこの時間は気温が低いですね」

この時間は一番人がいないため、彼女が周りを見ても誰もいない。少し歩いて広場の鐘に来た時だった。

ティオは他人より感知能力が高く、裏通りに無数に動く気配を感じた。

「こんな時間に何でしょつか?」

不思議に思い裏通りに近付くと思わず鼻を防いでしまう程の異臭が漂つて來た。

「う……これは……」

かつて、あの時に見た光景が脳裏に鮮明に思い出す。
いや、目の前の光景はそれ以上に酷い。

生臭い鉄分と肉の腐敗臭。

それに視線を向けるとぐちゃぐちゃとそれを貪るカラスの群だった。バラバラに裂けた腕や足、指。

死肉に群がるカラスどもはそのクチバシで目をつつき、ハラワタを抉る。

「あ……ああ……」

その光景にティオはその場で腰を抜かしてしまった。

悲鳴を上げたくとも恐ろしさで声が出せない。

口を動かしても恐怖で歯が震えてカチカチと音を鳴らすだけ。初めは気紛れだったのに……

どうして自分はこんな悲惨な光景を見ているんだ。

忘れたくとも忘れられないあの時の記憶に呪われているかのように錯覚する。

「ああ……どう……して？」

「なんでだろう、わたしがこんな目にあっているのは？
わたしはただ、あの人に会いたいだけなのに……」

そう思つたときティオの背後から一本の腕が伸びてきて、ティオの体を引き寄せた。

何者かの胸元に引き寄せられて、顔が見えるよりも早くに頭を胸に抱えられた。

その時にコートの裏側にある銀細工が目に入った。

「大丈夫だ、安心しin」

「やつぱりアレは……」

「やつぱり憑いて来たか、死神」

その言葉を最後にティオの意識は途切れた。

「ティオ助がいなくなつただあ！？」

特務支援課にランティイの声が響いていた。
朝食時になつても現れないティオを呼びに行つたのはエリイだつた。
ドアをノックしても返事がなく、部屋の中に入つてみるとそこは無
人だつた。

「部屋には誰もいなかつたわ。

オーバルスタッフはあつたから市外には行つてないとと思うのだけ
れど……」

「散歩じゃないのか？

ティオ助もそこまで子供じゃないんだ。

心配し過ぎだらう

「どう

「だが、さすがに食事の時間になつても戻つてこないのは気になる
だろう

いなくなつたティオを心配していると、突然通信機が鳴つた。

「はい、特務支援課です。

はい……

なんですか！？

……分かりました。

それでは市内を定期的にパトロールします

通話が終わるとロイドは他のメンバーに振り向いた。

「なんだつたんだ？」

「裏通りで殺害事件があつたそつだ」

「ええー！？」

「何だとー？」

「被害者は男性、カラス等により損傷が酷いため、身元の確認は取
れていない」

「最近多いわね……

今週に入つてもうすでに三人……」

「ああ、それで今回は緊急のモノがない場合は基本的に市内を巡回
して欲しいそうだ」

「街の奴らも不安だらうしな」

「巡回ついでにティオ助も探さないとな

「ああ、今日は各自指定の場所を巡回してくれ」

「分かったわ」

ティオの欠けた特務支援課の一 日が始まった。

第10話 欠けた支援課（後書き）

言つときますが、今回本編でも書いたように死神はありません
今回短いのは次回が長くなりそつだつたからです
それではまた次回で……
…
すでに貼つた伏線回収しようとしたらさらに貼るしかなくなつた…
で

第1-1話 テイオの記憶（前書き）

今回は捏造大量になってしまった……

あと、基本的に土日祝日は更新するつもりはないです
書く時間がそれたり、調子に乗れたらするかもしれません

第1-1話 テイオの記憶

「許せない許せない許せない許せない許せない許せない許せない」

死神は闇の中を漂う。

血に塗れた手からポタポタと血が垂れる。

「あの人 の作品を勝手に奪うなんて許せない」

死神は正しく呪詛の様に発していた。

同じ場所をグルグルと円を描く様に歩く。

足元にある大量の水分が足を出す度にビチャビチャと音がする。

「あの素晴らしい価値を理解出来ない輩がそれを持つことなど許せない」

その呪詛はまるで何かを讃えるように咳かれる。

「僕が初めての理解者なんだ」

恨むよつこ、悲しむよつこ、羨むよつこ死神は呟く。

「だから他の奴らがそれを汚すなど許されることだ」

その空間に常人が踏み込めば、一瞬で気を失つくらいの狂氣と血臭が充満していた。

死神はしゃがみ込み、足元に満たされた血を掬い、目の前のモノに掛ける。

まるでそれは神像を清めの水で浄化する様だった。

「後にも先にもあの人理解者は僕だけなんだ」

死神は讚えながら目の前のモノに血を注ぎ続けた。

「だから僕はあの人へ捧げ続けるんだ」

アルクエイドに抱えられたティオは住宅街の誰もいない屋敷に連れて行かれていた。

ソファにアルクエイドのコートを敷き、その上に寝かされていた。

「私まで連れ出すなんて、ここはちょっと都合が悪いのだけど

「分かつていい」

ティオを見守るアルクエイドに溜め息をつきながらレンは文句を言う。

アルクエイド自身もレンをこの住宅街に連れて来たくはなかった。しかもこの瞬間に……

この住宅街にはレンの本当の親が住んでいるのだ。

ある程度は鉢合わせにならないように気をつけてはいるが、不確定

要素はある。

レンは親に捨てられていると思っていたのだ。

「それでも、お前には伝えておかないと困ることだ」

「一体何だと言つたよ？」

「死神が現れた」

「ツツツツー？」

アルクエイドの言葉にレンは息を飲んだ。

「あの狂人が現れたの？」

本当に獣のように鼻が利くわね」

「人は捨てている」

「既にその身は畜生の身つてね」

「笑い事じやない」

アルクエイドとて死神は厄介だった。

レンは言つように死神は異様に鼻が利く。

自分よりも強者……

レンやアルクエイドとは絶対に出会でくわさないのだ。

一回、彼らで死神を消そうとしたのだが、噂があつても出会いはないのだ。

それ程にまで鼻が利く。

「それで」の娘はびくついたの?」

「死神の現場を見ていた」

「あら、御愁傷様ね」

「…………」

出来るだけ辛氣臭い空氣にしないとレンは軽口を言つが、重い空氣は変わらない。

「…………ま、待つて……ぐださ……」

魔されてるティオは藻搔くように手を動かし始めた。その手の動きは何かを掴もうとしているようだ。

「待つて、下さい……わたし……つれつ」

何かを願うように手を伸ばすティオ。けれど、その手は空氣を掴むだけだった。目からは涙が流れていった。

「何を魔されてるのかしら?」

「さあな」

レンの言葉に冷たく返すとアルクエイドはティオに近寄った。

「安心しろ、お前は何も見ていない」

普段の言動からは想像できないほど優しい言葉を田を漂つティオの手を握って呟つ。

その光景にはレンも驚いていた。

暫く躊躇っていたが、ティオは落ち着いた。

「どうにつけどもりなのかしら？」

返答によつては……

あくまでも笑顔でレンはアルクエイドに呟つ。

「俺が原因なのだから、最低限のことはしないとな」

「アルのせいじゃないでしょ」

「俺が来たから憑いて来た様なものだ」

「それはどうかしらね」

死神の行動理念は確かにアルクエイドが元になつてい。

しかし、今回の原因とはあまり関係ないとも言える。

死神はアルクエイドの作品のある場所に現れるのだ。

それは最初の事件からだった。

気紛れで孤児に渡したペンダントを何処で知ったのかさえも分から

ない。

だけど、そこに死神は現れた。

「…………」

歯痒いアルクエイドは奥歯を噛み砕かんばかりに噛み締める。

「アル……」

そんなアルクエイドにレンは背後から抱きついた。本当は抱きしめたいのだろうが、彼女らの身長差ではレンが抱きついてるようしか見えない。

アルクエイドは死神のことになるといつも自分が原因だと言ひ。その度にアルクエイドは自分を責める。そんなアルクエイドをレンは幾度と見てきた。だが、そんなアルクエイドに抱きつるのは初めてのことだった。

「……アレは俺が作り出したような物だ」

「それってどういって……？」

「あ……」

その意味を問おうとする前にティオが目覚めた。

「……私を連れて行つて下れー」

「は？」

ティオは目を覚ますと、暫く視線は宙を彷徨っていたが、アルクエイドを見るとそう呟いた。

アルクエイドは何を言われたか分からなかつた。

「夢の内容じゃないかしら？」

アルクエイドに抱きついたまま、レンは目を覚ましたティオを見た。数度瞬きするとティオはようやく此処を何処か確かめるように視線

を動かした。

「あの……！」

見覚えのない場所だと気がつき、ティオは田の前のアルクエイドに尋ねる。

「此処は住む街の空き家よ」

やがてアルクエイドから離れたレンはアルクエイドを押しのけてティオの前に出る。

「あの私は一体……」

「思い出すな！ が良いわよ」

氣を失う寸前に何があつたか思い出さうとするティオをレンが止める。

「俺は支援課の奴らに云えてくる」

「あの、私も行きます……」

ティオがいることをアルクエイドがロイドたちに伝えたようと外に向かうと、ティオは起き上がるが体が悲鳴を上げた。
何もしてないとはいっても、目を疑うようなことに出会い、トライアトマを思い出したのだ。

頭が悲鳴を上げて当然だった。

「こいから、寝ておきなさい」

レンに押されるままにティオは寝かされた。

「私を連れて行つて下さい……か」

「レンちゃん、聞いてもいいですか？」

アルクエイドが出て行つてから数分後、寝かされているティオは口を開いた。

「なあに？」

「あの人は何者なんですか？」

「どうこいつ意味？」

質問の真意が分からずにレンは聞き返した。

「あの人は……」

それから先を口にしていいのか分からず、ティオは口籠もつた。

「恐らく、アナタが思つてゐる通りの人よ」

ティオの言葉から察したレンはそう言つた。

「そうですか……」

それを聞いて安心したのかティオは目を瞑ると、先程とは違う安らかな寝息が聞こえ始めた。

「俺をてめえらと一緒にすんじゃねえ！」

かつての記憶。

忌々しい、人体実験の頃の記憶。

そこにあの人現れた。

先刻まで無関心な表情だったのに、一瞬で激高した。

わたしの場所からでは何を言われたか聞こえなかつたけど。

ぐるぐると何処から出しのか、わたしをいつも傷めつける人を鎖で縛り上げていた。

それでもその人はわたしを見るときと同じ顔で嫌な笑顔をしていた。その人がさらにあの人何か言つと、その人はさらにきつく鎖を締め上げられた。

限界以上に締め上げられたあの人は血をぶちまけて死んだ。
一緒に肉片も私の方に飛んできたりしたがわたしは何も気にならなかつた。

今まで苦痛を与えてきた人がいなくなつた。

その事実がわたしの中でとてつもなく嬉しかつた。

これでもう痛くされないのだと思つたから。

激高した感情を息荒く沈めようとしているあの人はわたしに気づくと歩み寄つてきた。

わたしの目の前まで行くとわたしの顔に付いた血や肉片を手で擦り落してくれた。

ずっとわたしはそれを呆然と為すがままにされていた。

わたしはあの人首から下げる歪な形の翼が目についた。

「いたぞ！

アレらを使え！」

「くそっ」

「……いや、助けて……」

あの人後ろを向くと同時にわたしはそう呟いていた。

あの人背後から声が聞こえる。

それと共に獣のような声が聞こえる。

それはわたしと同じ子供だつた。

だけどそれは最早人とは思えない動きをしていた。

あの人はそれから逃げるように獣をかわしながら部屋を飛び出た。

「くそ、あいつはなんなんだ。

おい、コイツらを別の部屋に入れておけ」

獸を連れてきた人が側の人に行つてわたしを強引に引っ張っていく。
あの人はいなくなってしまった。

やつとこの苦痛から助けてくれると思ったのに。

わたしは別の部屋に入れられてまた苦痛の日々を過ごすことになつた。

それからの日々はこれまでとは少しだけ変わった。

前の人気が死んだからか、前ほどの苦痛ではなくなつた。

あの人気が助けてはくれなかつたけど、多少の感謝はしている。

あの人気が来てから数日後、わたしは別の人達が助けに来た。

「君に伝えることがある」

その中で一人がわたしに話しかけてきた。

「これは依頼主からの言葉なんだが……

あの時に君を助けられなくて悪い、とのことだ」

あの時のことはわたしも助けられた時は殆ど覚えてなかつた。

あれは夢だと思っていたし、それを言われた時もまともな状態じやなかつた。

だけど、今日初めて分かつた。

あの時の出来事は本当の事で、あの人はアルクエイド・ヴァンガードなどなど……

第11話 テイオの記憶（後書き）

獣はグノーシスの未完成品を大量に投与された子供という設定です
すぐに脆く消え去りますが、一時的に驚異的な身体的能力になると
しています

第1・2話 灰色のクロスベル（前書き）

ここひりで穏やかな日常を入れようとネタを考えていたら時間がかな
りかかりました
そして、変な風に重くなっちゃいました
まともな日常が書きたい
ネタも欲しい、切実に

第1-2話 灰色のクロスベル

「どうして知らない振りをしたんですか？」

ティオがアルクエイドのことを思い出した日からすでに10日が経過していた。

「はあ、振りじゃない」

あれから毎日、ティオはアルクエイドにウォータクスに乗せて貰った時に否定されたことを問うていた。

「嘘です」

仕事がある日でもすぐに終わらせて、工房にいないときは街中から見つけ出す。

今日もまた、百貨店の前で出合ってしまった。

今回はじつもと違い、ロイドたち支援課のメンバーが揃っていた。

「今日は一段と絡むわね」

毎度の如く、ウォータクスの後ろに乗っているレンが言つ。もはやこの遭り取りも珍しいことではなくなつていた。

止めても聞かないティオにロイドたちに対処法はなかつた。

ティオが居なくなつたときに何があつたかよく知らない彼らは戸惑うしかなかつた。

けれど、それでもこの光景を幾度と見ていれば慣れもある。すでにランディは面白そうに笑っているし、エリィは微笑ましそう

に見てくる。

ロイドに至っては苦笑するしかない。

「だから覚えていないと言っているだろ?」

「絶対嘘です」

もう何度も繰り返されたか分からぬ不毛な取りが続けられる。

「それより、貴方達は今日は何でしたの?」

「今日は休日ついでに街のパトロールでもしてみたと思つてな

「パトロール?」

支援課からパトロールと聞いてアルク・ロイドは眉を潜めた。

「死神対策なんですよ

「無駄なことを

「何も知らないからでしょ?」

レンの言葉にアルク・ロイドは呆れながらも黙つとすくせめ反論された。

「教えるわけにもいかんしな

「一般人が襲われる可能性が無いのが救いかしさね

今の支援課では敵うべいか出合つことと無いだらうと判断しての言葉だった。

「そつちは何の用なんだ?」

「今日はアルとトートなの」

そつ言つてレンはアルクエイドの背後から抱きついた。

その言葉に支援課のメンバーの反応は様々だった。

ロイドは苦笑し、ヒリイは微笑ましそうに笑い、ランディは冷やかしていた。

ティオは先程からずっとアルクエイドに問いただしている。

「食料が切れてな、補充ついでに外食だ」

レンの言葉に呆れながらもアルクエイドは訂正する。

「男女が一緒に外食して買い物したら立派なデータじゃない」

「あーはいはい、やうだな」

その言葉にレンが頬を含ませて文句を言つたがアルクエイドは面倒くさそうに顔を背けて言った。

「とこつか、休日まで自ら仕事とはじめ苦労なことだな

「本當だぜ、せっかく今日はナンパでもしようつて思つていたのよ

「だから今日は有志でと言つたじゃないか」

「ロードだけじゃなく、お嬢やティオ助まで行くんなら俺だけ遊びにもいかんだろう」

「ハントさんは普段は不真面目振つてゐるが、いつはつてくるんですね」

「ハントの言葉にティオはあからさまに溜め息をついて言つた。

「おーおー、そういう事言つのは口かあ？」

「い、いひやいです」

ハントはティオの顎を思つてせり引つ張る。

「仲が良いわね」

「レンちゃんと比べたらまだまさ」

「当然よ」

「.....」

何故自分に懷いているのか分からぬアルク。ロードは溜め息をつくしかなかつた。

「そうだ、丁度昼時だし、一緒に食べに行きませんか？」

「別に構わないが」

「みんなはどうだ?」

「ううね、いいんじゃないかしら」

「俺も賛成だ」

「構いません」

アルクエイドの返事に少し悩んでいた支援課のメンバーは頷いた。アルクエイドたちが最初に予定していたといつ飲食店を目指して、一同は東通りへと向かった。

アルクエイドたちは東通りにある飲食店、龍老飯店にやつてきた。各々が好きな注文をし、それが運ばれてくるのを待っていた。

「そういえば此処に来るのは久しぶりですね」

「不良たちの時以来だな」

「ここのは香辛料が多くて刺激が強いんだよな」

「「J」を選んだのはどひかのコクエストなんですか?」「

「アルよ、アルは「J」の料理が好きなのよ」

「好きとこつか、東方系の料理が舌に馴染むんだよ」

「へえ~、俺も好きだが馴染むって感じじゃないなあ。
血いんだけど刺激が強いんだよな」

「出身の違いだらうな」

「どこ「J」とは東方出身ですか?」

「恐いくな」

「恐いくな?」

「小さい時のことは覚えてないんだよ。

そこで拾つたと言われたからそうだと思つんだが……」

「拾われた?」

「傷だらけで倒れてたんだよ」

「それは……」

アルクエイドの言葉に支援課のメンバーは沈黙してしまった。
聞いてはいけないことを聞いてしまったような神妙な顔をしていた。

「覚えてないから気にしないでくれ。」

親がいない奴らなんて世界にいへりでもいる

「やつこつ問題じゃないでしょ、アル」

「他人の当たり前は自分の当たり前じゃないってことだ」

そう言つてアルクエイドは急に真面目な顔をした。

「とにかくお前たちに聞きたいことがあつたんだが」

「な、何でしようか?」

態度の変わつたアルクエイドは困惑しながらもロイドたちも真面目な顔をした。

「クロスベルとこつこの場所をどつつけひ?」

「クロスベルを?」

「特務支援課と変えてもいい、どつつけひ?」

「.....」

「そつ難しく考えなくていい、色で答えてくれてもいい

「色、ですか?」

ロイドは田を閉じて少し考えてみた。

「黒、ですかね」

「その真意は？」

「色々な思惑が渦巻いていて、混じり濁っているからです」

「混ざっているから黒……か」

アルクエイドはロイドの言葉に何度も頷いて頭に反芻する。

「俺の考えは灰色だ」

「灰色、ですか」

「ああ、正義も、慈悲も、寛容も、悪も、善も、欲も、思想も、意志も、何もかもが混ざっている。だから何にも成れず、透き通らずに灰色なんだ。

黒でも白でもない、何かの答えを出す前に新たな色が混ざって新たな問題が現れてしまう。

そういう場所なんだよ、クロスベルはな

「…………」

その言葉にロイドたちは何も言えなかつた。

暗に言われているのだ、これからも何かが起こることを……その事実に、そのことを知つてゐることを不思議に思つた。

「そつ構えるな、氣楽にしていればいいわ」

小声で今はなと最後に呟いたが彼らに聞こえたことはなかつた。その後、運ばれてきた料理の味が分からぬいくらい、彼らは考えて

しまつていた。

アルクエイドに言われた真意が知りたくて……

先程まで変わつて、昼食中は至つて静かになつてしまつていた。

「本当に性格が悪いわね」

敢えて複雑に考えさせるアルクエイドに視線を向けながら、レンは呆れていた。

第1-2話 灰色のクロスベル（後書き）

そう言えばこの世界にサンタクロース的なのっていうんでしょうか?
クリスマスとかバレンタインって存在するのでしょうか?
バレンタインは碧でも出てきた製菓会社を使えばいいとして
正月とか大晦日のイベントって使っていいのかな?
そのへんで少しネタを考えているのですが…

第1-3話 死神の探し物（前書き）

今回は死神だけの登場です
あと + 1 もだけど

第1-3話 死神の探し物

ぱぢや。ぱぢや。ぱぢや。ぱぢや。ぱぢや。

死神は足元の血を掬つては台座のモノへと掛けた。
幾度と、幾度とそれを血で染めるかのように。
その背後で、何か動くものがあった。

「…………」

「あ、田が覚めた?」

椅子に縛り付けられた男が田を覚ますと死神は振り向いた。
姿こそ黒いシャツか何かをかぶつているのか真っ黒で見えないが、
声はまだあどけなさの残る幼い少年の声だった。

「おじりやんやつと起きたんだねー」

「誰だ、お前はー?」

異常な臭気に呻きながらも男は椅子をガタガタと動かしながらも問
う。

「ぼくのことなんていーじやん。

それよりもおじりやんに聞きたいことがあるんだよねー」

「な、なんだー?」

何でも答えるから放せー!

「簡単だよー?」

あの人モノを何処にやつたのー？」

「あの人！？」

モノってなんだ！？」

「おじちゃんも知らないのー？」

「またハズレかー」

「ハズレ……？」

き、貴様が仲間を殺つたのかー！」

「だつて誰も答えてくれなかつたんだもん」

仲間が何人も目の前の奴に殺された。

そのことだけで男が暴れる理由は十分だつた。

「き、貴様ああああああああああああ！」

しかし、男がいくら暴れようとも椅子がガタガタと音を出すだけで身動きすらままならなかつた。

「でも、おじちゃんが嘘をついてるかもしれないねー」

死神は台座の横の箱から何かを掴んだ。

「これなーんだ？」

箱から出したそれを子供が親に褒められたくて良い事した証でも見せるかのように男の前に出した。

「そ、それは…?」

「や、おじちゃんの拳銃だよー」

「か、返せー!」

「返すわけ無いじゃんー」

男の言葉に死神はケラケラと笑う。

そして何処で覚えたか得意気に弄り始めた。

「おじちゃんは他の国の遊びを知ってるー?」

「遊び?」

「そー、いつやって一発だけ弾を残しておくんだー。」

「後は全部空砲だよー?」

死神は誇らしげに言ひへ。

何処で手に入れたのか分からぬ弾を適当に詰めていく。

「でー、いつやっておじちゃんの頭に当たってー」

「お、おいー?」

「な何する気だツツ」

「だつて、教えてくれないんだもんー」

そうこうして死神は引き金を引いた。

「はは、ははッ、はー……はー……」

「ハズレー」

男はもう既に恐怖で呼吸すら安定してなかつた。

「じゃ、次ー」

さらに死神は引き金を引く。

「またハズレーかー。
運がいいねー」

「し、ししし知らないんだ！」

「別に知らなくても帰す気はないよー」

死神はさらに連續で一回引き金を引く。

「むー、残念ー」

「あ、あははあつはつははは」

男は恐怖で引き笑いを起こしていた。

「そー、今回はどうかなー？」

死神が引き金を引くと、またカチンという音だけがした。

「本当に運がいいねー」

「も、もももももひこいだろうー..?」

「なにを言つてゐのー?」

帰さないつて言つたじやんー」

そして死神は最後の引き金を引いた。

「.....」

「残念ー、最初からなにも入つてないよー。」

ありや、氣絶しちやつた」

男は恐怖で氣を失つていた。

それを死神はとても可笑しそうにケラケラ笑つている。

死神は一頬り笑うと男を縛つたまま運び始めた。

男が連れられていった先はルバーチュの組織がいる裏通りの館前だ
つた。

「ふんふんふんふーん」

死神は実に楽しそうにロープを至る所に結んでいた。
鼻歌を歌いながら結び終わると一度タイミングよく、男が目を覚ました。

「おきたー?」

男が田を覚ますと田の前には恐らく死神の顔があるであらう頭部の
があつた。

もっとも死神の眼前も黒の何かで見えはしないが……

男はそれに驚いて声を上げそうになつたが、布で猿轡をされていて
声を出せなかつた。

「おじちゃんが教えてくれないからちょっとこつもと違つことして
みたよー」

そう言つて死神はルバーチュの扉から結ばれたロープをツツーっと
指で辿つていく。

男はそれに釣られてロープを同じよつに辿ると次第に顔色が真っ青
になつていつた。

そのロープの先は自分の真上に繋がつていて、その結ばれたる先に
は鋭い刃物があつた。

それに気づいた男は今まで一番暴れ始めた。

「あはははー。

動いて無駄だよー。

動くと紐が解けちゃうかもよー？」

「ツツツツツツー！？」

死神のその言葉に男は動かなくなつた。

「もうこれが何かわかつたよねー？」

男は勢い良く顔を前後に振つた。

寝転ばされているから首は固定されているが地面に顔を少しづつけ
てしまつていた。

それはギロチンだつた。

ロープが解けるか扉が開くと刃が落ちてくるようになつていた。

「最後の質問ー、もつかい聞くよ？」

「あの人モノは何処にあるの？」

何回もされたその質問に男は幾度と横に首を降つてきたが、今回も同じだつた。

「そつかー」

残念そうな声色の割には微塵もそんな感情が籠つていなかつた。

男は本当に知らないのだ。

男に死ぬ理由があるとすれば、死神に捕まつたくらいだ。
要するに運が悪かつたのだ。

「じゃ、ばいばい

そう言つて死神は足元の石ころを拾つて紐の結ばれた扉へ投げた。
それに絶句して男は必死に逃れようと暴れたが動けなかつた。

そして、扉に石ころは当たり、しばらくするとゆっくりと扉は開かれた。

それと同時に紐は解け、勢い良く刃物は自らの重さでそのまま男の首筋目掛けて落ちてきた。

「この日、さらに死神の行為によつてルバーチュの工作員は死んだ

これで五人目の被害者だつた……

第14話 絡みあう思惑

前回の昼食会からさらに一月後。

今日、アルクエイドとレンはアルカンシェルに来ていた。

「殺人予告ねえ……」

アルカンシェルにイリア・プラティエの殺人予告状が届いていた。

「……………で？」

「予告犯は何がしたいんだ？」

その予告状をヒラヒラと軽く振りながら、アルクエイドは鼻で笑つた。

「私を殺したいんじゃないの」

殺すと宣告されていながらも、イリアは実に明るかった。

「だつたらその人は馬鹿なのね」

「見る、こんな子供にも馬鹿にされているぞ」

「子供じゃないわよ」

「ですが、流石に見過ごせないと思います」

イリアが依然と明るいのはこの様な幼稚な脅迫状など履いて捨てるくらい来ているからだ。

容姿端麗、人を魅了する言動、その上類い希な有名人ともなれば、それに嫉妬する人間などいくらでもいる。

今回もそれに類するものではあると思われるが、一つだけ違つものがあつた。

「まあ、名前が書いてあつては氣にもなるか」

「初めてのことだしね」

今回は最後に名前が書かれていた。たつた一文字で『銀^{イシ}』と……

「銀か……」

「知ってるの？」

「共和国の不死と言われる伝説の暗殺者だ」

「伝説？」

「一世紀以上同じ名前が裏社会に出回つてゐる」

「それで不死ね……」

「だからそんな名前を書いてる時点で馬鹿なんじゃない」

「そう言つて、レンはとても可笑しそうに笑つ。

「本物がそんなモノ送つてくるわけ無いし、偽物に間違いはないな」

「でも、偽物が送ってきたとして、一体何のために?」

「さあな……」

本物であつたらそんなモノを送るわけがなく、すでに暗殺しているだろう。

偽物であるなら予告状など送れば警戒されて素人がするには困難になる。

故に、ソレ以外の目的であることが分かる。

愉快犯という可能性もあるが、銀という名を書いて送っている時点で安易にそういう判断は下せない。

一般人が簡単に知れる名前じゃないのだ。

- 何処までも、その名から逃れられないの?

客席で問題の予告犯の目的について四人で考えていた。

だが、その中でリーシャだけが思い詰めたような顔をしていた。

「…………」

それをアルクエイドは気付かれないように見ていた。

「何処までも逃れられないといつのなら、私が守るだけ」

ジオフロント内を歩く伝説の暗殺者『銀』

「でも、一体誰が？」

ある程度の予想は出来るが決定打に欠けることには違ひがない。自分で止められれば良いのだが、確実性を取るならば犯行現場を抑えることだ。

しかし、その時は絶対に銀は手出しができない。

だから、こいつは遠まわしをする必要があった。

考えながらもジオフロント内の魔獣を圧倒しながら目的の深部へと急ぐ。

「ねえ、やっぱり私だけが逃げることなんて出来ないのかな？」

首から下げる、歪な形の銀翼を握りしめて、銀は軽快なりズムを大きな音で響かせている部屋の前まで辿り着いた。

「私が殺したことを許してはくれないよね……」

仮面に遮られて顔は見えないが、容易に泣きそうな顔をしていることは予想が出来た。

銀はその思考を振り払うように頭^{かぶり}を振るとドアを開いた。

いつもと違う深藍のロープを纏い、フードをかぶる。

それに道化を表す仮面を付ける。

その様は闇でしかなかつた。

その姿からは人らしさを感じられず、機械の様に歪んで。全てを襲う、闇の恐ろしさしか分からぬ。

「何処に行くの？」

「月を見にな」

「そう、気をつけてね。

今の貴方は得物が無いのだから」

「分かつてゐる」

その言葉を最後に闇は消えた。

音もなく消え去った闇は消えても尚、その場に色濃い闇を残していつた。

「銀は存在しますよ」

ロイドたちはアルカンショルから依頼を受けていた。イリア・プラティエの暗殺予告を情報を受けて行動していた。

共和国の暗殺者ということで、前にイアン先生から聞いた黒月と呼ばれるマフィアに馬鹿正直に訪ねていた。

その黒月クロスベル支部のリーダーたるツアオ・リーと運良く面会することができた。

その男が発せられた言葉に一同は息を呑んだ。

「ちゃんと手続きを踏めば、銀を雇うことは出来ます。

不死と言つものがどういう仕組みなのかは知りませんがね」

ツアオはずつと人のよい笑顔を浮かべている。しかし、微塵も目が笑つてないどいない。

「しかし、今クロスベルは銀が霞むくらいの狂者が訪れているのですよ」

「なんだって！？」

「それは一体……？」

「――最近、頻発している殺人事件はご存知ですね？」

「それは勿論」

「それはその人物の仕業なんですよ」

「一体誰なんですか?」

「さあ、誰も知らないんですよ。
ただ、噂だけが一人歩きをしているのです。
死神と呼ばれる狂者がね……」

ツアオはそこまで言つて大きく息を吸つ。

「それともう一人」

「まだ居るつてのか?」

「ええ、死神を生み出した王様がね」

そこまで聞いて、ロイドは少し眼を閉じて何かを考えて目を開いた。

「どうして、俺達にそこまでの情報を教えてくれるのですか?」

「最初に言つたじゃないですか。

私は貴方達のファンなのですよ」

最初から最後までツアオは人のよい笑顔を浮かべていた。

第14話 絡みあう思惑（後書き）

アルクエイドとレンの過去について補足

アルクエイドはレンの親がクロスベルにいることと、教団にて人体実験を受けていたことしか知りません

レンはアルクエイドがヨルグの養子であることと、教団のような組織を殲滅することが多いことくらいしか特に知りません

後は何度か一緒に行動することが多かったといつづけだけです

第15話 銀と闇

ジオフロントに引き籠もつているハッカー、ヨナ・セイクリッドから銀の依頼を受け取り、ロイド達は星見の塔へ向かう。

内部では時・空・幻の上位3属性が働いていた。

塔の前で調査をしていたノエルを加えて、5人は塔内部へと突入した。

それから数分遅れで塔の前に蠢く闇が現れた。

「…………」

-助けて-

闇は塔を見上げると、痛みを抑えるかの様にこめかみを抑えて頭を振る。

痛みを抑えると、闇は開かれた門を足蹴にして塔外壁を駆け上がった。

一気に塔の頂まで駆け上がった。

闇は頂に着くと、そこに吊された鐘に歩み寄る。

鐘を指で削らんとばかりに忌々しそうに爪を立てる。

自分でも何をしているのか理解出来ない闇は、苛立ちを込めて鐘から指を離す。

闇は再び頭を振つて塔内部へと降りる。

そこには特務支援課を待つ銀の姿があった。

「お前は誰だ？」

暗殺者たる銀に気配を微塵も感じさせずに接近してきた闇へと銀は振り返る。

「只の傍観者だ」

コソコソと階段を響かせながら闇は銀に近づく。
得体の知れない闇に銀は得物を抜く。

「悪いが私に傍観者風情を相手している暇はない」

常人では視認出来ない速度で銀は闇を切り裂く。
しかし、銀の凶手は空を切り裂くだけだった。

「手が早いな。

よほど余裕が無いと見える」

「…………」

銀は答えずに避ける闇を切り裂き続ける。
しかし、闇には届かない。

「殺るなら本氣で來い」

「 ツ 」

闇の発言に絶句した銀は無言で立ち止まる。

「まあ、本氣で来られたら流石に不利だから丁度良いか」

そう言って、闇は靴の踵を勢い良くもう一方の踵に叩き合わせる。その瞬間、両の靴先から靴の形に沿つて刃が現れた。さらに折り畳んでいた袖を手が隠れるくらいまで伸ばす。

「 ああ、始めようか」

闇は銀へと駆け出す。

首を刈るよつに脚を回す。

銀はそれを斜め下に避けながら、凶手で腹を狙う。しかし闇は回し蹴りの勢いのまま、それより早くにナイフを見えない手から投擲する。それに気づいた銀は大きく後ろに跳ぶ。

「 流石に速いな」

「 それだけが取り得なのでね」

「 そんなことはないだろう

本の少し、微かに闇は楽しそうに揺らめいた。
今度は銀が動いた。

先程の意趣返しなのか、闇の首を狙う。
闇はそれをナイフを左から当てて受け流す。
回つて回転の力を使って銀の凶手を受け流すと、左手にナイフを握

りしめ、銀の背中に刺そつとする。

銀は受け流された勢いのまま走り抜ける。

その最中に振り返り、闇へ短刀を投げる。

闇はその短刀を真正面からナイフで止める。

しかし、眼前で止めた短刀の柄に符が付けられていた。

「戦技・爆雷符」
クラフト

「ツツー!?」

銀が冷たく吐き捨てる様に言つと符が爆発した。

爆発の煙が消えると、そこに闇は存在していなかつた。

煙が消えると同時に銀の斜め上からナイフが數本飛んできた。しかし、銀は苦もなくナイフを避けて、ナイフは床に刺さるだけだつた。先程銀が居た場所の少し後ろに闇は降りてきた。

「今のは少し焦つたぞ」

「余裕で避けていた癖に」

「気付いていたか」

闇は敢えてギリギリで避けてダメージを受けたと思わせて油断を誘つていた。

しかし、銀はそれを見抜いていた。

「互いに本氣で闘えないのが歯痒いな」

「…………」

闇の言葉からは何も感情が伝わってこない。

銀はその言葉に応えずに入った。

「どうした？

迷っているのか？」

「ツツ……………？」

「そんなに鈍い殺氣ならそんなところだらう」

淡々と闇は銀に言葉を告げる。

「予想はついてるが聞いておくか」

「…………」

銀は闇に応えずに仮面で見えないが睨んでいるのが容易に想像出来る。

「どうして自分の名を勝手に使われて、他人に任せるとか？」

「こういう仕事は名が一番大事だ。」

それを貶める行為だ。

他ならぬ銀自身がしないといけないことだ。

それを何故他人に任せるとか？」

まるで犯行の時はそれ以上に大事な仕事が有るみたいじゃないか

そこまで言われて銀は闇にこれまでとは比べ物にならない位斬りかかる。

それ以上何も言わせないとばかりに切り伏せる。

「それ以上口を開くな！」

しかし、闇は両の手のナイフで逸らし続ける。最初はやや押されながら攻撃を捌いていた闇は、次第に攻勢になつていった。

最初は闇が退きながらだったのが、足が止まり、今では逆に銀が退き始めている。

「焦りすぎだ。

裏稼業で生きて来た割には意外と直情的だな。

それとも何か、ずっと後ろめたいことでもあるのか？」「

「ぐッ……」

「それは何だ？
後悔か？
懺悔か？」

闇は問う。

銀の抱えた後ろ暗いモノを探るように語る。

その間も攻撃の手を休めることなく、銀を追い詰めていく。

「思えば最初に見た時も何か思い詰めていたな

「ツツツ……！？
何の話だ！？」

一体何時の話をされているのか分からぬ銀はそれまでも言葉もあつて、つい直線的に闇の胸元を横に一閃した。

反撃を予想していなかつた闇は慌てて避けたが凶手がロープの胸元

を裂ける。

「それとも、何か忘れたい」とでもあるのか？」

「ツツツツツツツツツツ…？」

一番触れられたくない言葉と有り得ない筈の物が闇の胸元で光っていた。

それを認識してしまった銀は驚きで行動を止めてしまった。

「どうして……」

「あ？」

「どうして……
どうしてソレを持つてているのですかー…？」

顔を上げて訴える銀の目線の先には銀の持つている歪な形の銀翼に似た歪な形の銀翼があつた。

「何の事か知らないが、どうやら待ち人が来たようだ

下からやつてくる気配を察した闇は靴の刃を戻し、再び袖を捲る。

「今回は此処までの様だ。

それでは、再び会うことも有るだろ？

その時は争い無しで語り合おう

「ま、待つて！」

銀は消えようとする闇に縋るよつに手を伸ばす。

しかし、銀が止める間もなく、闇は音もなく消えさせてしまった。今まで1番速く闇に駆け寄つて掴もうとするが空を握るだけだった。

「やつぱり私は逃れられないのかな？」

胸元に隠された闇が持つていた銀翼とはまた少し形の違う銀翼に手を当てて、銀は小声で呟く。

その姿だけ見れば、迷い子が親を捜しているような姿だった。

銀は下から登つてくる5人の気配を感じて顔を上げる。

「そうだ、私が今しなければならないことは

第15話 銀と闇（後書き）

みづやく初めての戦闘演出でした
やっぱり戦闘は難しい
アルクエイドのクラフト出す予定だったのになあ
まあ、それはその内ということです

第16話 因果代償（前書き）

葛藤がないわけじゃない

葛藤する材料がなかつただけ

という言い訳 ですね、はい

精進します

これ書いてる間にも思つたんですけど

キーアの力つて人の尊厳とかいう問題の前に記憶つてどうなるんだ
ろうね？

零〇〇でロイドの記憶が少しだけ出てきたけど

第16話 因果代償

もう既に辺りは暗くなっている。

今頃アルカンシェルではプレ公演と支援課による予告犯逮捕が行われているだろう。

距離にすればそんなに時間がかかる筈じやないのに口はとつぐに沈んでいる。

昼間から体が重い、頭が痛い。

ようやく目的地である月の寺院が見えた。

「リリからだ……」

ふらふらと足が覚束無い。

塔の鐘を見てからか、触つてからかどっちかだと考えられる。いや、もっと前からか？

思えばクロスベルに来てから何かがおかしい。

何かに呼ばれているような感覚がずっとしている。

塔に行つてから、ソレが強くなつた。

今もこうしてふらふらとソレに呼ばれる様に歩いている。意識はある。

別にこの先に行きたいと思つてるわけじゃない。

しかし、足はその先へと向かう。

頭の中では向かつてはならないと警告している。

でも、俺はその先を知らないといけない気がする。

何かの真実に辿りつける気がするから

「？？？」

真実を知つてどうするんだ？

分からぬ。

自問自答なんてしたことがない。

いつも只々、マイスターに恩を返したいだけだつた筈だ。

それだけの為に生きてきた筈だ。

寺院の中を歩いていると変な魔獸が居る。

そもそも魔獸なのか、これは？

分からぬ。

自分を狙つてくるモノがなんのか分からぬ。

だけど、俺の前に立ちふさがつてくる。

「邪魔だ、邪魔をするな！」

一斉に襲いかかつてくる魔獸が邪魔だ。

「戦技 クラフト 陽炎」

体を揺らして軸をずらし、的を安定させない。

それに釣られて魔獸共の狙いが各々ズレてしまう。

その隙間を最低限の動きで摺り抜けながらナイフで斬り付ける。

俺が通り抜けると魔獸共は体液をぶちまけながらバラバラとなる。

それを気にも留めずに最奥を目指す。

そして寺院を最奥にソレはあつた。

微かに振動して鳴いている鐘が

「グツツツガアツツツ！」？

痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い。

鐘の泣きそうな音が頭に響く。

痛さで俺は膝をつく。

こうして意識を保つことさえ困難なほど痛い。

仮に気絶したとしても痛みですぐに起きてしまうだろ。つ。頭どころか脳を驚撃みにされて揺さぶられている気分だ。音に反応するかのように、頭に知らないモノが映る。こんな光景を俺は知らない。

神だなんて知らない。

御子なんて知らない。

因果なんて知らない。

力を振り絞つて鐘に少しでも近づく。

「お……俺に……見せるな……」

今も尚、泣きそうな音で鳴いている鐘に近寄る。
痛い痛い痛い痛い痛い痛い。

今すぐにでも鐘を止める。

鳴らしていくはいけない。

本能でそう感じる。

「俺は……

俺はッ……」

脚が重い。

でも一步ずつ近づく。

泣いている緑髪の少女が見える。
そんな少女なんて知らない。

「俺はそんな」との為に生きているわけじゃない……！」

痛みに耐えながらも、原因である鐘を力いっぱい殴る。頭に響いている音を搔き乱すように鈍い音が響く。

「はあ……はあ……」

泣くよつな音と鈍い音が次第に重なりあつて段々と小さくなつていつた。

「…………くそがつ…………」

俺は鐘に殴りつけた格好のまま倒れた。

そのまま目を閉じる。

起きる気力すらない。

瞼の裏に微かに先程とは違う光景が浮かぶ。

もつそれはピントのずれた写真の様に何が『』っているか分からぬけど。

ぼんやりとどんな光景なのか理解できてしまつ。

俺が知つてゐると違つ。

それを俺に見せるな。

理解するな。

覚えるな。

見てはいけない。

だつて

だつて、これじゃ

俺は

みたいじゃないか

第16話 因果代償（後書き）

どんなに万能な力であれつとも反作用はない
特に制御できない力なら尚更……
つて感じの話でした

第17話 誰かの夢（前書き）

早々ともう20部ですね
書いた文字も5万字超えました
早いものですねえ
それでもまだまだ全体では序盤ですね

第17話 誰かの夢

「うーは……」

アルクエイドはまだ夜が明ける前に目を覚ました。

微かに白い日の光が辺りを照らしているが太陽自体は見えない。

「確か、俺は呼ばれて……ッ」

何があつたか思い出そうとして、頭痛がする。思い出すことに警告されているかの様だ。

それを気にせずに無理矢理思い出そうとする。

「そうだ、鐘！？」

鐘に呼ばれた事を思い出し、背後にある鐘を見るが今は鳴りを潜めていた。

自分の思い違いだったのかと思つ位鳴る気配はない。

鐘が鳴つていた時に何があつたか微塵も思い出せないまま、アルクエイドは此処に居ても無駄だと感じ寺院から去つた。知りたくないことを思い出しそうだから……

アルクエイドは山道を降りてくるが足取りは極めて重い。

それでも、誰にも会わないように気をつけながら工房に戻る。誰にも会いたくないが、一人で居たくもなかった。

工房にはまだ日が昇る前に着いた。

工房内に入ると人の気配を感じた。

「マイスター……」

レンから頼まれたのかパテル＝マテルをメンテナンスしていた。アルクエイドはそんなヨルグの姿を眺めていた。

暫くは眺めていたが、アルクエイドは声を掛けずに自室に向かった。ヨルグもアルクエイドには気付いていたが、挨拶すらなかった。自室に着いたアルクエイドは懐にしまっていた仮面ごと無造作にロープを脱ぎ捨てた。

首から下げる歪な銀翼を握り締めて、ベッドの上で丸まつた。

「違うよな、違うよな、違うよな

- 認めたくない -

頭の中に響く鐘の音を反射的に否定していた。

その一心だけがアルクエイドの中に溢れていた。鐘の音が告げることを認めてしまつたら……

「俺は一体何なんだよ？」

- 今も昔もこれからも、ずっと なのかよ -

自分を否定する考えが頭によぎつた。

それを必死に頭から追い出す。

それでもその思考は止められない。

アルクエイドは逃げるよつにいつものロープを掴んで走りだした。

独りでいたら嫌な考えに染まってしまいそうになると思ったアルクエイドはクロスベルまで来ていた。

いつもの黒と深紅のコートを着て、ゆっくりと歩いていた。市内は昨日のアルカンシェルのプレ公演と支援課の犯人逮捕で大いに盛り上がっていた。

歓楽街も西通りも中央広場も東通りもそこら中でその話が聞こえる。他に比べて、比較的人が少なく、後日にある創立謝祭の準備に追わされている港区に来た。

人の邪魔にならないように端のベンチに座っている。アルクエイドは呆然と準備の光景を眺めていた。

「…………」

湖から流れてくる快い風が頬を撫でる。

すぐ側から聞こえてくる喧騒もどこか遠くに聞こえる。

それから一時間くらい眺めていただろつか。

「そんな所で何をしているんですか？」

不意にすぐ近くから声が聞こえた。

「あ…………」

声の方に顔を向けるとそこにはティオ・プラターが立っていた。
今、会いたくない一人だった……

昨日はアルカンシェルの依頼を無事達成することが出来た。
いつも何かに付けて支援課を日の敵にしていて快く思っていない輩
にはいい氣味だと思う。

昨日のこともあり、今日は仕事は休みとなつた。

それでも市内に出ると事件の事で周りがとやかく五月蠅いことには
変わりはなかつた。

けれど、それは自分たちがしたことが認められていることで少しだ
け頬が緩んでいた。

それでも少し煩わしく感じていたは事実だ。

対応に少し疲れて一息つくために快い風が来る港区に來た。
そして、彼を見付けた。

港区の端にあるベンチに一人で座っている彼はいつもと様子が違つ

た。

彼の視線の先には楽しげに走り回っている子どもや働いている大人たち。

それを羨ましそうに悲しそうに、泣きそつた目をして見ていた。わたしは今まであんな目をした人を見たことがなかった。まるで生きている世界が違うような……

違う、アレはそんな目じゃない。

そう、まるで生きていることが羨ましいような目だ。だからわたしはそんな目をしている彼が余計に気になってしまった。だけど、声をかけていいのか悩んでしまった。でも、放つておくことは出来ない。

例え、わたしを助けてくれたことを忘れていても。それが夢だと思っていたことでも

-なんだ、結局わたしも口イドさんのこと笑えない、お人好しじやないですか -

だからわたしは彼に声をかけた。

寂しそうに子供が一人で膝を抱えている様な彼に……

「そんな所で何をしているんですか?」

「あ…………」

声に反応してこちらを向いた彼は驚いて、さらに泣きそつた目をした。

アルクエイドに声をかけたティオは何も言わぬままのアルクエイドを暫く見ていたが、答えが返つてこないと溜め息をつきながらアルクエイドの横に座つた。

アルクエイドはティオから逃げるようになしだけ反対側に移動した。行動だけ見ればティオの座る場所を空けたように見えなくもないが、紛れも無くそれは逃げだつた。

暫く彼らは無言で座つていた。

「今日はどうしたんだ？」

先に口を開いたのはアルクエイドだった。

「昨日の事件で周りが騒がしいので少し疲れて休憩です」

「そうか」

嫌そうな顔をしているが、僅かに口元は緩み、声はやや嬉しそうだつた。

「今までわたしたちを厄介者扱いしてきたくせに急にべた褒めして来るんですよ。

本当に鬱陶しかったのでロイドさんに押し付けてきました」

「ははっ」

言つている内容と感情が全然咬み合つておらず、嬉しそうな顔をしているティオ。

それが本当に眩しくて、羨ましくて、アルクエイドは乾いた笑みを零した。

「初めて笑いましたね」

アルクエイドが笑つたことにやや驚きながらティオは言ひ。

「そり、俺も笑いはするぞ」

「そうですか？」

その割にはいつも仏頂面じやないですか」

ティオはアルクエイドをジト目で見てくる。

なんともないただの会話が、心地よく感じる。

「大体ですね。

いつもいつも溜め息ばかりで、口を開けば短く否定の言葉ばかり。こちらがいつも話しかけているのに、真面目に聞こえともしないで面倒くさそうな顔して……」

ストレスが溜まっているのかティオはつらつらとアルクエイドを次々と言ひ。

そんなティオを見ていると自然と微かに口元が緩んだ。

「……聞いているのですか！？」

「ああ、勿論」

アルクエイドが上の空なのに氣づいてティオは声をあげる。アルクエイドは反射的にそう答えていた。

「ならないです」

明らかに聞いていないのはティオにも分かつていた。けれど、それを指摘することもなく、不満気に頬を膨らませながらベンチに勢い良く凭れる。もた

再び彼らの間に沈黙が訪れるとアルクエイドは再び田線を前に戻した。

前かがみになつていてアルクエイドを横田でチラチラとティオは見ていた。

明らかにいつもと様子の違うアルクエイドに聞きたいことが有るのは明白だったが、ティオは一切何も触れようとはしない。それからまた両者は何も言わなくなつた。

さらに10分くらいしたらまたアルクエイドが口を開いた。

「何も聞かないんだな」

ずっと真横で気にされ続けていたら嫌でも氣づくだろう。

「勝手に荷物を背負われるのは嫌なんでしょう？」

「誰から聞いたんだ」

「レンちゃんですよ。」

「」の間、ウォーカスの乗り方と一緒にあなたの対処法を色々教え

てもらいました

「余計なことを……」

ティオの言葉にアルクヒュードは血潮の笑みを浮かべた。

「それとは別のことをしてわけなんですがね」

「別のことへ。」

「ええ、レンちゃんが言つてましたよ。
アルの一番の優しさは辛い時は何も言わずに側にいてくれること
だって、ね」

「……マセガキが」

その言葉でアルクヒュードは本当に泣きそうになつた。
きつく眼を閉じてそれを堪えると顔を上げて語り始めた。

「少しだけ、少しだけ……」

自分がしてきたことに自信が持てないんだ。

全てが夢で、幻で、そう思つてただけなんじゃないかつて思つて
な

「……わたしにはあなたに何があつたのか分からぬけど、わたし
もつこ最近までは夢だと思っていたことがあつたんです。
今でもそれが本当の事だったのかは分かりませんが……」

ティオはそこで区切ると大きく息をすつた。

「例え夢だったとしても、本当はなかつたことでも　わたしはそれを救われたのです」

自信満々での時のことを見たことは言えない。
でも、あそこで少しでも救いを感じれたから、わたしは生きている
のだとティオは思っている。

・ロイドさんの熱血とこつか臭いセリフが移りましたか・

ティオは自分で言ったことに少し照れ臭く感じてしまっていた。
記憶に自信はなくとも、救いの事実には自信をもって肯定できると
ティオはまっさつきつと言つた。

「そうか……」

アルクエイドはそれを心に浸透させた。

「少し落ち着いたよ。

俺はこれで行くとするよ」

決して笑顔ではないけれど、泣きそうな顔ではなくなつたアルクエイドはそつと立ち上がつた。

「そうですか

ティオはそれにそつと返すとアルクエイドは歩き出した。
ティオはその後ろ姿眺めていた。

「ああ、俺のことアルでいいよ」

「分かりました。

また会いましょう、アルセス」

振り返つて軽く手を振つてアルクニードは去つていった。
姿が見えなくなるまでティオは眺めていると背後からロイドがやつ
てきた。

「はあはあ……」

走つてやってきたのか、それとも疲れてこのかロイドは息が荒か
つた。

「ロイドさん」

「ティオ、俺に押し付けていくなよ」

「すみません」

「リリで何をしていたんだ?」

「アルクニードさん、アルセスと少し話していただけだよ」

「アルクニード……?」

「…………?」

アルクニードの名に変な反応をしたロイド、トイオは不思議に思つ
た。

「…………あー」

あ、ああ、アルクハイドさんか。

レンちゃんこと同じようつた言つなんて少しそば仲良くなれて慣れたみたいだ
な

「ええ、少しだけですが」

先ほどのローベルの反応を歎訝に思しながらトライオはローベルと一緒に
支援課のビルに戻つてこつた。

外伝・キセキクエスト・（前書き）

衝動的にネタを思いついたので描いてみた

反省はしている、けど後悔はない！

目覚ましイベントが普通じゃつまらないよなって考えてたら思いつきました

本来なら創立祭の中でのイベントですが恐らくでないと思いつけて書きました

文句は受け付けません！

何してんだこいつ…………みたいな感じで生暖かい田で見てください

い

外伝・キセキクエスト

「ロイド……ロイド……」

「ん……ん?」

「起きなさい、ロイド……」

「セシル姉……?」

「起きなさいロイド。」

今日は貴方の16歳の誕生日。
王様に呼ばれると念ずべく田より

「はー?」

「16?」

俺もう18だよー?
てか王様ー?」

「もう寝ぼけているの?」

貴方は16じゃない、ほり早く着替えて行つていらっしゃい

「ええええええええ」

「よく来たロイド・バーニングス

「え、えつどティーターセン?」

「そなたの兄、ガイ殿が魔王退治に出かけて早3年。

連絡も途絶えて長い時間が経った。

しかし、未だ魔王の脅威はより強くなつてきている。

そこで、君はこれを持って魔王退治に旅立つのだー！」

「ええええええ、なにこれ！？」

しかもこれって…… 50//リフ・」

「そうだ、一人では心細かろう。

街にあるイリアの酒場で仲間を探すといいだろう。

後、ついついでと言つちゃなんだが、魔王に攫われた娘を助けてはくれんかの？」

「は、はあ……」

「いきなり何がどうなつているんだ？」

魔王とか、俺が16とか……

ここがイリアの酒場か

「さあ、ヨシユアいくわよー！」

「うわあー？」

「待つてよエステル。

ああ、すみません大丈夫ですか？」

「あ、ああ

「まひ、ヨシユアさつさんと行くわよ。

父さんの声を治すために塔に登るわよー！」

「ちよ、ちよっと、君は女の子なんだからもう少し清楚やかに……
ああーー。」

「…………なんか、口づけたこと爺さんも一緒にいそうな感じだ
な」

「こりゃしゃい、イリアの酒場へ。
踊り子さんには手を触れないとね」

「踊り子?」

「ほひ、あの姉妹よ」

「オリビエ！」

「まだまだ飲むわよ～」

「いやいや、シララくん、僕はそろそろ限界なんだけど」

「何よ、私の酒が飲めないってのーー？」

「あの、踊り子の方が密に絡んでるんですけど……
そして、占い師の方は無言で飲んでるしお。
てか配役逆だろ！？」

「なんで姉が占い師で妹が踊り子！？」

「細かいことはいいじゃない」

「はあ……」

「取り敢えず仲間を探すか」

「お兄さん、仲間をお探しですか?」

「ん?」

君は?」

「わたしは武闘家のティオ」

「武闘家!?」

明らかに力なさそうだろ!」

「問題ないです。」

「この魔導手甲オーバルナックルは魔力を打撃力に変えて攻撃するので威力は抜群です」

「いや、それって……」

「ぶっちゃけて言えば、理の杖ですね」

「言っちゃダメだろ!?」

しかも武闘家は魔力ないだろ!?」

「おひおひ、騒がしいじゃないか」

「君は?」

「おひ、俺は僧侶のランティだ」

「僧侶の割にはガタイがいいね……」

「旅には体力がないときついからな、鍛えてるんだ」

「そりなのか」

「で、俺を仲間にしないかい？」

「君は何が出来るんだ？」

「おうよ、この昇天呪文で雑魚も魔王も一発だぜ」

「いやいやいや！」

「雑魚はともかく魔王に効くわけ無いだろ！？
君、絶対に魔力が0になるまで魔王にかけ続けるつもりだろ！？」

「あら、今日は一段と騒がしいわね」

「お、お嬢じやないか」

「ヒリィさん」

「え？」

「あら、仲間を探しに来た人かしら？」

「あ、ああ、そうなんだ」

「せつ、じゃあ盗賊の私はゼウス。
空き巣からスリ、魔獸からだつて盗んであげるわよ？」

「盗賊！？」

「魔獸からはともかく空き巣とかは犯罪だろー。」

そして、近い近い」

「あー、勇者については知らない人のタンスやツボを勝手に漁るんじゃなーの」

「う、違わないけどやっぱダメだろー。」

「はあ……

もう一人で旅に出よー。……」

「…………よつやく新しい街に着いた」

「あー、おにいさんも祭りのための装飾品を買ってこられたの?..」

「装飾品?..」

「やつよ、あの家で作ってるのよ。
おにいさんも行つてみたひづかしう。」

「試しに行つてみようかな?
すみません」

「ん、密か?

ちょっとまつてくれ、珍しい素材が手に入ったといひでな。
仕上げ中なんだ」

「それはすみません」

「別にいいや。」

「…………おし、完成だ!」

「へえ、綺麗ですね」

「これは祭りで使う草冠ならぬ銀冠つてとこだな。君、悪いけど祭りのある村に届けてくれないか?」

「それくらいならいいですよ」

「有難い、礼としてこれをやります。

この世に二つとしてない金属で作ったものだ」

「いや、これは……一つ」

「そう、王者のトンファーだ」

「何故つるぎじゃなくてトンファー!？」

「もう訳がわからないぞ……」

「おお、旅の御方。

村のために冠を持ってきてくれて有難う御座います。

私は村の商人のハイワースです。

これで娘の晴れ舞台が……」

「娘さんが主役なんですか?」

「そうなんですよ。

一度魔獣のせいで離れ離れになってしまったが運良く細工職の方に助けてもらつたのですよ」

「それは良かつたですね」

「あああ、君も祭りを楽しんでこつてやるか」

「分かりました、お言葉に甘えます」

「おお、ついに天使の儀式が始まるや」

「天使の儀式?」

「そうです。
この村に伝わる天使を乙女に降臨してもらい、祝福を受ける。
これが天使の儀式なのです」

「私は執行者Ｚ。・Ｘ・Ｖ『殲滅天使』レン。
みんないなくなっちゃえ」

「アレはさつきの女の子!-?
つてええええええええええ!-?」

「口……ド

「いきなり暴れ始めたし!-?

皆嬉しそうにしてるしどうなってるんだ!-?」

「ロイ…ドー」

「もう訳が分からぬ!-?」

「ロイ…ドー」

「…………ハツ！？」

「ロイドー、

大丈夫？

すごい魔されていたわよ？」

「あ、ああ、エリイか……
変な夢を見ていたんだ」

「ふふ、夢で魔されているなんて」

「洒落にならないくらいの夢だったんだ……」

「せひ、もう起きれい。

盥で待つてこらねわよ」

「ああ、分かったよ。
はあ……めぢやくぢやな夢だった……」

第18話 動き始める者達（前書き）

この話からいろんな立場の人物たちがより活発に動き始めます
アルクエイド支援課もそして今まで全く出ていなかつた遊撃士たち
も……

わ、忘れていたわけではないですよ？

取り敢えず、今は黒の競売場が一区切りの予定です

第1-8話 動き始める者達

ティオと会話を何かを感じたアルクエイドは次の日、裏通りに向かつた。

その裏通りにあるアンティークショップ『イメリダ』にアルクエイドは入つていった。

「イッヒッヒ、いらっしゃい」

中には煙を吹かせた怪しげな老婆がカウンターに座っていた。

「何の用だい?」

「アソタの物件を一つ貸して欲しい」

「……………へえ」

その言葉に意味深に笑い、アルクエイドを品定めするような目で見る。

「アソタは誰だい?」

「ヨルグの息子だ」

「おや、あの偏屈爺に子供が居たとはね」

イメリダは少し田を見開いて驚き、椅子に凭れて煙を吹かした。

「そうさねえ……

貸してやつてもいいが、無料で貸してやるわけにはいかないね

そう言つて、イメリダはカウンター前にいるアルクエイドに向かつて煙を吹かす。

アルクエイドはそれを鬱陶しげに手で払う。

「何が望みだ？」

「Aと名乗る者が今、このクロスベルに居るらしいじゃないか。そいつが作つていてる銀細工を幾つか持つて来な」

「Iのくそババアが……」

「ヒッヒ、アタシの情報網を舐めるんじゃないよ」

アルクエイドの鋭い視線も素知らぬ顔でイメリダは笑う。
最初からアルクエイドの存在を知つていたのだ。

どんな奴か知らなくとも、ヨルグの息子という情報でそれに辿り着いたこの老婆は侮れないとアルクエイドは認識した。

「ヒッヒ、そんなに構えるんじゃないよ。

そうさねえ……

出回つていてる物と同じようなアクセサリーじゃ価値が低いしねえ。
このクロスベルのマスクットである『みつし』の形のを幾つか
作つてもいいがつか

「また七面倒な物を要求しやがつて……」

そのアルクエイドの鬱陶しそうな言葉にイメリダは笑う。

「ここのアタシに貸しを作ろうつてんだ。

それなりの対価を用意してもらわないとね」

「3日後でいいな」

「期待せずに待つているよ」

「ほやけ」

ニヤリとイメルダは笑って、アルクエイドに煙を吹かす。
それを手で払つてアルクエイドは踵を返す。
アルクエイドが店を出でていつてからイメルダは呟く。

「ヒッヒ、まだまだヒヨウ子じゃないか

プレ公演が終わり、つかの間の休息をアルカンシェルのメンバーは
楽しんでいた。

その日玉である、リーシャとイリアは市内を巡っていた。

プレ公演の日からリーシャが何処か沈んでいるのを察したイリアは彼女を連れ出していた。

今この場でもリーシャの顔は何処か悲しげだった。

- なんでアレを持っているの？ 彼は生きている？ -

リーシャの中ではその二つの疑問が渦巻いていた。

「ほりリーシャ、今度はあっちに行くわよ

「イ、イリアさん」

沈んだ顔をしているリーシャをイリアはさらに連れ回す。

こうして無理矢理にでもイリアがリーシャを連れ回してるのは、何か気分転換になればと思ってのことだった。

だが、イリアはそれをおぐびにも出さない。

理由を言つた所でリーシャがそれを認めるわけがないからだ。

だから、気遣つてることを悟らせない様にいつものように振り回す。

無論、リーシャとてイリアの気遣いには気づいている。しかし、イリアもそれを認めることがないだろう。

これが、彼女たちの関係を表していた。

イリアはいつも自信満々で誰かを振り回す。

そんなイリアをリーシャは眩しそうに見ていた。

そんな後ろ姿に何処か懐しさを感じて

-あの子は寡黙だったけど、同じようにいつも連れ回してくれていた -

だけど、そんな気遣いでさえも、今のリーシャにとっては恥ましい記憶を呼び起こす一因だつた。
何故ならば

- そんなあの子を殺したのは私なのだから -

そんなことを考えていただからだろうか。

彼女は近づいてくる一人に話しかけられるまで、気づくことはなかった。

「あの～、ちょっといいですか？」

アルクエイドは百貨店に向かう。

これまで、幾つもの種類を作ってきたが、既製のキャラクターをモデルに作るのは初めてだった。

いつもは簡単な形が自分の想像内に存在するモノだけを作ってきた。

今回は既製品があるから、それを元に作らねばならない。
だから、百貨店に来て人形を買いに来たのだ。

「まさか、ファンシーショップに来ることになるとはな……」

明らかにアルクエイドは周りの光景との違和感が酷い。

いつものように仰々しいコートではないラフな格好とは言え、青年が、しかもそれなりに見栄えのする背格好のアルクエイドが居るは場違いとしか言いようがない。

もつと年がいったなら娘のプレゼントを選んでいると思えるかもしれないが、いくら大人びて見えるアルクエイドでもそつは見えない。

みつしいを探しているアルクエイドを遠巻きから訝しげに見ている者も居る。

少女の気に入りそうな人形やアクセサリー、置き物に紛れて青年がしゃがんで品定めをしていたら気にもなるだろう。

「……どれがみつしいなんだ？」

アルクエイドの前には無数の様々な種類のぬいぐるみ。

これまでぬいぐるみ等の人形になど興味を持ったことがない。

ヨルグの作品を何度か見たことがあるが、それとは此処に並んでいるのは全然違う。

元々、違いが分かつたところでみつしいを見たことがないアルクエイドに一見で理解できるわけがない。

正確には、見たことはあるかもしぬないが、それがみつしいだと知らなければ意味が無い。

「コレも違つ、コレも違つ、コレも……」

だから、アルクエイドはいちいち製品に付いている名前を確かめてみつしいを探していた。

一心不乱に名前を確かめながらブツブツと呟いていたら、それはもう怪しい通り越して怖い人だ。

「なんでこんなに数があるんだ……」

最初は周りにも名も知らぬ少女が見えたが、いつの間にか消えていた。

しかし、アルクエイドはそれに気づかずにはから次へとぬいぐるみを掴む。

そんな怪しいアルクエイドに近づく一つの影があった。

第19話 力の片鱗（前書き）

今日これ上げるつもりはなかつたのですが……

もう少し書いて調整してから上げるつもりだったのですが、なんと
ファルコムで軌跡シリーズの完全新作が出るじゃないですか！

那由多の轉記

アルクエイドの設定がああああああああああ！？

で、それが感じて焦りましたが

アレウロイデは機械の設定がやがて

それだけは言つておきます

第19話 力の片鱗

リーシャとイリアに話しかけてきた一人は一組の男女だった。

「あの～、ちょっとといいですか？」

「あら、遊撃士が何の用かしら？」

その男女は遊撃士の証たる、籠手の紋章を付けていた。

「アルカンシェルのイリア・プラティエさんとリーシャ・マオさんで間違いないですね？」

声をかけてきた少女ではなく、少年が問うてきた。
気さくそうな少女と違い、少年の方は少し真剣になっているのか、
目に力が籠つていた。

「ええ、そうよ。

それで、私たちに何か用かしら？」

「ある人物についてちょっと聞きたいことがあるんです」

少年はさらに目に力を込めてイリアに聞く。

それは態度は冷静だが、焦っているようにも見える。

「私はエステル、こつちはヨシュア。

レンツて娘を知ってる？

董色した髪の女の子なんだけど……」

「それなら知つていいわよ。
アルクエイドが連れてきていた娘だわ」

「アルクエイド？」

聞いたことがない名前にエステルが首を傾げる。
ヨシュアはその名前を聞くと微かに反応した。
だが、ソレに気づいたのはリーシャだけだった。

「アルカンシェルのオーナーよ。
髪が蒼く、目が深い青なのよ」

「そんな人がなんでレンと……」

聞き覚えのない人がレンと一緒にいることに気になつてエステルは
考え込む。

ヨシュアもヨシュアで、ブツブツと何かを呟いている。

「どうしたのかしら？」

「さ、さあ……」

一人の様子がおかしくなり、イリアとリーシャは首を傾げるしかなかつた。

ヨシュアは何処か思い詰めた表情をして、顔を上げた。

「ありがとうございました。」

「行こう、エステル」

「ちょ、ちょっと、ヨシュア？」

あ、えと、ありがとうね

エステルはいきなり背を向けるヨシュアに驚いて、急いで礼を言つて彼の後を追いかけた。

イリアとワーシャはその二人を呆然と見送るだけだった。

「ちょ、ちょっとヨシュア。

一体どうしたのよ？」

いきなり早足で去つたヨシュアを追いかけるエステル。
いつもおなじくヨシュアに感いながらも声をかける。

「もし、本当にアルならやばいんだ！」

「やばいって何が？

そもそも、そのアルクエイドって誰よ？」

エステルのやの言葉に足を止めるヨシュア。

「アルクエイド……

アルクエイド・ヴァンガードは……」

そこまで言つて、ヨシュアは大きく息を吸い、
そしてエスティルに振り向いた。

「君もアルゲントウム製品は知っているだろ?」

「そり、かなり有名だもん。

誰でも一個くらいには持つているんじゃない?」

「彼はその製作者だよ」

「ええ!?」

それだけ言つとヨシュアはむりで歩き出す。
エスティルもそれに慌てて続く。

「でも、それの何処がやばいのよ?」

「正直、これはどうでもいい内容だよ。

問題は彼の戦闘能力だよ。

彼の武器は特殊すぎるんだ」

「武器?」

「彼はその持ち前の技術で武器を全て自作しているんだ」

「その何処が問題なのよ?」

稀にだが、自分の手にあつた最高の武器を得るために自作する人物
もいる。

確かに珍しいことには違いないが、特殊とはまた違つ。

「誰も知らない技があるということ。

これは君もその怖さが分かるだろ?」

「それは、分かるけども……」

エスティルはヨシュアの言いたいことが全く分からなかつた。容量の得ないことばかり言つてこようつに感じる。

「そして、彼はレン以上に人形を自在に操ることが出来るんだ

「ちょっと待つて、それって……」

エスティルの声を無視して、ヨシュアはさらに続ける。

「彼はオーバーマペックすらも自作することができるので

それは即ち、アルクエイド・ヴァンガードはパテル＝マテルに匹敵するオーバーマペック操れるということ。

「おまけにこいつの方が問題だ」

まだ、それ以上に厄介なことがあるとヨシュアは言つ。

「アルは父さんと同じなんだ」

「ツツツツツ！？」

その言葉にエスティルは衝撃を受けた。

彼女たちの父親、カシウス・ブライト。

それと同じこと。

即ち、それは理に至つているということをエステルは瞬時に理解し

た。

第19話 力の片鱗（後書き）

ヨシュアの語るアルクエイドの力の片鱗。

近接での武力だけならアルクエイドはアリアンロードとタメを張れます。

流石に強く設定しすぎたとも思っていますが……

まあ、一番大事な得物がないので全力の銀レベルまでは下がっていますが……

アリオスに全力でやれば負ける程度ですかね？

まあ、そのくらいの強さと想定しています

最初のレンの余裕はこれが原因ですね

二人でかかれど、まず負けることはなかつたでしょうから……

すでにアルクエイドの二つ名を予想されている方もいるでしょうが、完全に出てくるのはもう少し後です

第20話 邂逅（前書き）

年末年始は予想以上に忙しかったです。
まともに書く暇がありませんでした。
今は落ち着いてきたのでもう少し早く更新できるようになるかも
⋮

第20話 邂逅

アルクエイドに近づく一つの影。

それらはアルクエイドの背後に近づくと声をかけた。

「こんな所で何をしているんですか?」

その声にアルクエイドは振り向くとそこにはティオとエリイがいた。エリイは苦笑して、ティオはジト目で見ていた。

「どうかしたのか?」

彼女たちに気づくとアルクエイドは立ち上がりそう言つた。

「ファンシーショップに怪しい人が居るので何とかして下さること店員に苦情が来ているそうです」

「それでどうしてお前たちが来ているんだ?」

「それは、私がこの百貨店のオーナーと知り合いだからよ

アルクエイドの疑問にエリイが苦笑しながら答える。

「どうか、では仕事頑張ってくれ。
俺は今忙しい」

アルクエイドは再び背を向けてしゃがみこむつとある。
それをティオが服を掴んで止める。

「だから、貴方がその怪しい人なんですよ！」

「何？」

「いいから、こっちに来てください」

ティオはそのまま服を掴んでアルクエイドを引っ張つてファンシー ショップから連れ出す。

訳が分からなかつたが、アルクエイドは大人しくそれに従つた。アルクエイドは百貨店内で話をするのかと思っていたが、それに反して外にまで連れ出されてしまった。

そして、百貨店を出た時だつた。

その時にはティオもアルクエイドの服から手を放していく、アルクエイドは渋々後をついて行つていた。

アルクエイドの左側から子供がぶつかつて來た。

「え……？
きやつ！？」

「おつと、大丈夫か？」

「あ、はい。

あ、あの、右手は大丈夫ですか？」

「…………」

「あ、あの……？」

「……大丈夫だ。

気を付けて行きなよ」

その子供にそう言つと走り去つていった。

ティオとエリイはその走り去つた子供を見送つたが、アルクエイドは子供が走つてきた方を見ていた。

その視線の先に明らかに異質なものが見えた。

黒いローブを羽織り、フードまでかぶつている。

場所が悪いのか、顔だけは暗く、アルクエイドには見えなかつた。ソレの背丈は大人よりも頭一つ分小さいくらいだ。

昼間からそんな格好をしていては必ず目立つはずなのに、誰もソレが見えないかのように振舞つている。

だけど、ソレは誰ともぶつからずに、むしろ周りの人々がソレを避けるかのようにつづっている。

ソレを数秒見ていると、不意にソレが笑つたように見えた。

その瞬間、ソレは人に遮られて見えなくなり、再びその場が見えると、もうソレはいなくなつっていた。

-本当に來ていたんだな、必ずお前を -

事件だけでは判断は出来なかつた。

けれど、今、確かに死神は姿を表した。

昼間の大通りで、人が多すぎて行動できることを分かつていて現れた死神。

挑発を受けたアルクエイドはあくまでも冷静でいた。

アルクエイドは嘗て一度だけ、死神と対峙したことがあつた。

その時のこと思い出して、アルクエイドはきつく右手を握りしめた。

腕が震える程、力を込めて握りしめた。

普通なら爪で手のひらが裂けてしまう程。

「どうしたの？」

ずっと、ソレが居た方に視線を向けているとエリイが声を掛けた。

彼女の後ろにはティオが見える。
どうやら、支援課の建物に向かっていて、アルクエイドが動かない
ことに気づいたようだ。

「いや、なんでもない」

握りしめていた右手を上げて、彼女たちには手の甲が見えるように
して軽く振る。

「ナラ?

ならいいけれど……」

エリイが背を向けて支援課へと歩く。

その後ろに続きながら、アルクエイドは振り上げた裂けた手のひら
を見詰めて軽く握り締める。

そして、なんとなく空を見上げた。

その空は、アルクエイドの髪のよつに蒼くなく、雲で覆われた灰色
だった。

支援課のビルの一階にあるソファに座らされたアルクエイド。その向かいにはエリイとティオが座っている。アルクエイドは腕置きに肘をかけて、足を組んで座っている。

「はあ……」

そして、氣怠げに溜め息までついた。
心底煩わしそうだ。

「それで、あんな所で何をしていたんですか？」

それを無視してティオは問う。

「銀細工の依頼で少しな」

「銀細工の？」

銀細工とファンシーショップが結び付かずに首を傾げる一人。

「どんな依頼なの？」

「…………」

「言えるわけないわよね

エリイに問われるがアルクエイドはそれに答えない。口を開かないアルクエイドにエリイは肩を落とした。

「別に言つても構わないけどな。

あるキャラクターの物を作れと言われてな」

「キャラクターですか。

それであんな所に居たのですか」

「世俗には疎いからな

「弓き籠もりですか貴方は……」

肩を竦ませて言つアルクヒイドにジト田で見るティオ。

「レンによく言われるよ

「それで、何のキャラクターを探していたの?」

「みつしこと呼ばれる物だが……」

「……みつしいですか」

その言葉を聞くとティオの目が明らかに変わった。

「流石にあそこにもないかと」

「そうなのか?」

「はい、かなりの人気があり、百貨店でも在庫がないそうです

「そこまでの物なのか……」

あのババアが取引に使つわけだ

「え？」

「いや、いじりの話だ」

アルクエイドは軽く手を振って話を逸らす。

「しかし、困ったな。
ないと手が付けられない」

「……確かに、みつしいのねこぐるみなら、歓楽街のカジノの景品に
有るはずです」

「なんだと？」

少し、思案顔でティオが言ひ。
その発言にアルクエイドが前屈みになる。

「やうひくれば、こないだの依頼で取つたわね

「結局、取つたと云つよつせむ//ラドコインを貰つて交換する羽目にな
りましたけどね」

「うふふ、ランティが肩を落としていわよね

「自信満々で任せると云つておきながら……
情けなさすぎます」

「ならばカジノに行つてくるか

そう言つて、アルクエイドは立ち上がる。
扉の前まで歩いて、振り返る。

「何故お前も自然について来ようとしているんだ？」

そこにはティオがさも当然の様に立っていた。
ファンシーショップに居た理由も分かり、これで解放されたと思つ
ていたアルクエイドは問う。

「また貴方が怪しい行動をしないか見張る為です」

「怪しつて、おい。

……はあ、勝手にしな

「はい、勝手にします」

アルクエイドは溜め息をつきながら振り返り、扉を開けて出ていつ
た。

その後ろをティオはついて行く。

それを微笑ましく思いながらエリィは一人を見送った。

第20話 邂逅（後書き）

おまけとして、ティオのアルクエイド調査レポート的なお話を書いてみようと思うのですがいかがでしょうか？

IBCにおけるAの情報、レンから聞くアルクエイドの話を少し考えていきます。

一話ほど前のティオがレンから聞いたところを記します。
あ、後この話から話数を入れるようにしました。
このほうが分かりやすそうだったので。
どちらが良いでしょうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5147y/>

英雄伝説 - 刹那の軌跡 -

2012年1月5日21時48分発行